

---

# 幻想組曲

之ち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想組曲

### 【Zコード】

Z5091Y

### 【作者名】

之ち

### 【あらすじ】

夏の日のこと、明石海峡大橋にて連続飛び降り事件が発生。

向かったのは一人の魔術師と一人の奏者。

義足の奏者は荒れる海原で巨大な妖魔と対峙する。

## 第一章一話

七月が終わる頃、いつもの通り連絡もなしに唐突にその客人はやつて來た。

大阪の天王寺駅より南下した阿倍野との中間に一区切りだけ人通りの少ない通りがある。その通りにはぎちぎちにマンションが並んでいるが無意識のうちに誰もが遠ざかっているようだつた。内一棟、外装は綺麗で新築に見えるマンションの地下へ客人の車は姿を隠していく。ボンネットの中からドラムを叩くようなエンジン音が響いていたが車体と共に消えていく。今日も三十五度の猛暑日である。車を日の下に置く訳にはいかなかつた。

彼女の車が入つていったのは真っ白の外壁が日を引くマンションの地下だつた。新築のように見える白い外壁は今年の春、ようやく耐震強化を終えた改築時に塗り直されたもので周囲とは格が違うよううにさえ見える。だが車の行き着いた先は地上とは別物だつた。地下駐車場は地上からは全く別の世界を作り上げている。耐震用に補填された鉄骨がそのまままで見えている。まだ工事半分で放置されているようにさえ見えるのだ。そして増えた鉄骨のせいで車一台分停められなくなっている。特に六十年代のアメリカ製車両にはその身体を収納するにはきつい。

ハンドルをさばき起用に停める。エンジンを切つて出てきたのはO-L風の女。髪は襟元まで黒のスーツとよく合つてゐる。助手席に置いていた茶色の紙袋を持つて地上へと続く階段へと向かつ。

「エレベーター欲しいわね」

ほんの僅かな時間でも額に汗がじんわりと滲む。昨今の天候といふのは地獄のような猛暑となつてゐる。太陽の下にいれば蒸し物になつてしまつよう暑さ。彼女も同じだ、黒いスーツにも汗が滲みだす。せつかくの新品なのにと肩がぐくりと落ちる。

彼女は目的の四階に着くとさらに奥へと向かつて歩く。部屋の数

は少なく全ての階に三部屋となつていて、その割には狭くワンルームである。ヒールがコンクリートを叩く音とセミの鳴き声だけが五月蠅く鳴っていた。薄暗く影になつている洞窟のような通路の最奥にたどり着くと間髪いれず呼び鈴を鳴らす。そして一切の反応を待たずにドアを開けた。

まるで茶碗蒸しの蓋だった。ドアを開けた瞬間、これまでにないほどの熱風が彼女を溶かそうと噴出した。行き場を無くした熱風が吹き荒れたにすぎない。だが一息吸えば喉を焼こうとする風に息を飲むしかなかつた。一旦顔を背けて息を整える。

「おはよう、悠

現在、朝の十一時。すでにおはようと言つ挨拶は相応しくない。挨拶の向こう側にあるのはフローリングが剥き出しになつたワンルームの部屋。彼女の足元には靴が三足並んでいる。どれもロングブーツで黒色。気軽にかけられるような靴はない。右手側のキッキンは新品同様で使つてている感じはなかつた。

「ちょっと聴こえてるの？」

少し大きめの声で部屋の奥に向かつて言つ。すると「聴こえてるよ」と関心無さそうな男の子の声が返つてくる。まだあどけなさが抜けでおらず、いや幼さの抜けない女のように高い声をしていた。四人も集まれば忽ち満員となるほど部屋の奥に少年はいた。

部屋を速く歩いて一番に手にとつたのはエアコンのリモコンだつた。すぐに起動させると全開になつていた窓を閉める。どれだけ窓を開けていても風なんて吹いていないのだから関係ない。それでも少年は興味無さそうにしていた。

「笙子さん、鍵かけてないんだから勝手に入つて来ればいいじゃないか」

壁には一本の人間の足を模した器具が並んでいる。床に腰を下ろして少年は愛用のギターに手を伸ばしていた。その少年、部屋の主である彼には脚がない。正確には膝から下が消滅している。壁にかけている義足がなければ立ち上ることは出来ない。笙子は義足を

一田見てから視線を落とす。少年、悠はギターの弦を張り替えていた最中であった。

「ヒアロン使いたいって言つてゐるでしょ、倒れるわよ」

「別に耐えられるよ。危ないって思つたら水も飲むし」

床に皿をやればペットボトルが一本転がっていた。中身はあと半分程残つてい。ニアシンが吐き出す令氣こよのく部屋の井で

籠つていた熱が冷めていく。

「また背が高くなつたんじゃない」

悠は相変わらず床に座っている。立っているわけじやない。見て

とも成長はするものだ。

「そんなの良く解るね

「当たり前でしょ、あなたの保護者なんだから、当然の事よ」

彼女の名前は笹塚笙子。少年の名前は長瀬悠。二人に血の繋がり

はなく戸籍上も親子ではない。笙子は今年一十五になるが未婚であ

る。現在は身元引受け人として少年、長瀬悠の保護者をしているにす

ぎない。

少いと併せて、年少にして、それ

少年の身体はまだその歳ほどもない。膝から下が存在したとして  
も身長は百六十に満ない。もう半年もしないうちに十六になるとい  
うのに男っぽさはなく女の子のような背と姿をしている。スカー  
トを履いて外へ出れば男は氣付かずこ声をかけるだろう。

そんな悠の黒髪を撫でるとその手に持っていた茶色の紙袋に悠は目をやつた。駐車場からの短いなかで底には水滴が溜まつていて色が変わっていた。

「それカルコサの？」

「食べたい？」

「モルガニ」

カルコサは天王寺駅近くに最近出来たばかりの洋菓子店である。店には珈琲も飲めるカフェがあり中高生から二十代前半の女性でい

つも満員になつてゐる。いつだつたか笙子が適当に選んで店に入つた事があつた。そのときに食べたチーズケーキが絶品だつたため悠に買つてきたのがきっかけだ。

絶妙な甘味と程よい弾力感が調和して口の中に幸せが進る。パイ生地は硬くチーズの部分と口の中で調和する。至高の一品が手ごろな価格で味わえる。

紙袋から取り出したのは長方形の箱とアイス珈琲。水溜りはアイス珈琲から出たものだつた。ギターのネック部分を器用に太ももにかけると、箱の天井を開くとさつそくとばかりにチーズケーキを一つ取り出す。ふんわりとした生地が指の先で弾けると口にする前に笙子を見た。

「仕事？」

アイス珈琲は床に置く。透明のプラスチックカップには水滴が溢れている。

「そうよ。テレビがないから知らないのも当然ね。今度支給してもらつから見なさい」

エアコンの風の一身上に受けける彼女は写真を一枚差し出す。ケーキはそのままで受け取るとその写真を見た。青い海が広がり緑の島とコンクリートのビル群を繋いだ巨大な橋が写つている。

## 明石海峡大橋

関西地方に住むなら誰でも一度は見たことがあるだろう巨大な橋である。本州と淡路島を結ぶ巨大な橋が写真には写つていて。悠もよく知つていて改めて確認することはない。

「今、兵庫県で連続している自殺についてイザナギから調査依頼がきたわ。何でも同じ場所で自殺が連続して起きていて、たつた二週間で四人。さすがに裏があると予測したつて訳よ」

写真をよく見れば橋の中心でパートカーや警察が陣取つていて。小さな豆のようなものだつたがその服装や白黒パンダの車両が警察だ

と認識させる。

「自殺と僕に関係があるの？」

「単なる自殺なら悠の出番はないわね。イザナギも事件現場の確認を依頼しているだけなんだけね。おそらく悠の力は必要になるわ」「なんださ？」

「感よ」

笹塚笙子の感は良く当たる。彼女の場合、感というよりは予見や予言に近い。これまでに得た知識と経験からの推測は、より正確さを増していくと以前語ったことがあった。

「まあ場合によつては悠の力は必要ないかもしないわ。だから三日くらい経つたら着くようにして。もちろんそのギターも万全にしてね」

ギターを指す。エレキとも木製でもない。形状こそギターそのものだつたが赤と黒の一色で構成された禍々しいものであった。

この部屋の中で見える私物といえば義足とギターくらいな物だ。あとは作曲に使つたメモ用紙と文房具が散乱している分だけ。悠がギターを手にせずどこかへ出かける事はない。彼が生きていく上で必要なものだ。受け取つて以来ずつと傍にある物である。

「当然、持つていくよ。でもなんでこんな依頼引き受けたの？ 確証はないんでしょ」

「贅沢は言つていられないの。ほら……こっちの世界じゃ卒業シーズンが終わつたばかりでしょ、だから新人の魔術師が多くてね。上から五月蠅いのよ、仕事はそつちに回すから笹塚さんにはこっちをお願いつてね。それに、ここで点数稼がないと独立なんて夢のまた夢よ」

笹塚笙子、彼女の仕事は魔術師。魔術式を持ち寄り炎や風を起す体現者。古来より神秘を起こす超常の者。傍から見れば綺麗なお姉さん程度にしか見えない。だが一度怒れば少々の天変地異を起こす。軽い気持ちでちよつかいを出そうものなら酷い目にあう。

一年と半年、彼女もまた魔術師の学院を卒業し新人の一人として

数々の仕事をこなして来た。一年に十人もいれば多いほうだが今年は十五人と大量の術者が関西にやつてきている。笙子にとってはライバルが増えるだけで自分の地位を脅かす脅威が増えたに過ぎない。共に活動している悠も同じである。悠は歳相応の学校へ通う事はなく彼女の手伝いをしている。少年は魔術師ではないにしろ、生まれ持った力で彼女の右腕として活躍している最中である。笙子よりも後になるが昨年の秋頃より日本へやってきて活躍している。同業者の目を惹きつける者として充分な働きを見せていた。

### 笙子の目的は事務所の設立にある。

現代の魔術師というのは世知辛い物で肩身が狭い。彼らの能力は科学という技術にお株を取られその存在を映画や小説といった創作物でしか日の目を見ないのだ。その魔術師たちの目的は個人又は集団で魔術の研究を行なう場所を作ることにある。この世の中で彼らが大きな魔術を行う場合、専用の場所が必ず必要となる。笙子の場合は個人の事務所を作ることにある。彼女自身が追い求める探求心のためである。

だが笙子は悠が何をしたいかは聞いたことは無かつた。

昔はともあれ現代では魔術なんて物はなくとも人は生きていける。すでに魔術よりも科学は発展しているのだ。空を飛ぼうと思えば飛行機を使えばいい。火を起こそうと思えばライターを、マッチを使えばいいのだ。呪文を唱えて杖を振るう時代ではない。そんなことをすること事態、センスがない。

オカルトや魔術の時代ではないと彼ら自身も言う。魔術師たちも火を起こすならライターを使うのだ。一々、呪文を唱えない。

しかし彼らが存在しなければならない理由もある。自然の摂理を人類が凌駕する日まで魔術師達の存在は必要となる。

そんな魔術師たちはその土地にある支部、連盟に参加し仕事を得る。笙子の参加している組織は今回の依頼先であるイザナギ。イザナギは魔術師たちに情報を与える重要な機関であり関西魔術連盟の地方組織である。

長瀬悠も現在はその組織に名前を連ねている一人である。

連盟は魔術師たちが規定に沿つて判断し独立する権限を与える。魔術師が自分の魔術の発展を目指す。その時、他人に害が及ばないとは限らない。権限を与えられ公式に活動する術者は関西において百に満たない。事務所を持つてるのは一部の成金や資産家が多いとされる。そういうた一部以外は自由気ままに仕事をこなしているにすぎないのだ。

事務所の設立には連盟より認可が降りる必要がある。笙子は未だ認可されていない。だが協力者たちの生活を優先した結果でもある。まだ十五の悠が一人で生活できることが理由の一つである。

「それで場所は？ この橋の真ん中？」

「見てのとおりよ。淡路島。明石から船が出でるからそれに乗るといいわ。着く前に現場もみれるしね」

写真ともう一つ、彼女はパンフレットを渡した。赤いタコのキャラクターが笑っている画とフェリーの写真が載つたものだ。背景には大きく橋も写っている。いかにも人の集まりそうな場所で橋には多くの車が走つている光景が見える。悠はこういった人の多いところは好きではなかつた。

「海だとしても人が多そだね」

「交通規制もされてるわ。船を利用するお客様が多くなつてるらしいわよ」

「好きじゃないな。他に交通手段は？」

「高速バスしかないわね。あと飛び降りは全部昼間に起きてているから深夜に移動するのはなしよ」

悠は他人とともに同じ場所にいる事は好きではなかつた。笙子は「あきらめなさい」と肩を叩く。彼らの仕事の大半は人気のない場所。自然に囲まれた農村やくたびれた廃村が主となる。また海や山の中といった自然のなかが多い。確かに橋の下には海が広がり写真に写る淡路島の風景は緑一色の山だったが人の通りは途切れることはないだろう。

「じゃあ、私は先に行くわね。人と待ち合わせもしてるし」と言って玄関へと歩いていく。

悠はそんな笙子に目もくれずパンフレットを見ていた。人の多い場所には行きたくは無かった。静にしていたかつた。かといって我侭が通るわけでもない。そうしているうちに笙子は部屋を出て行ってしまった。彼女は土産と仕事の話しを聞かせにやって来たにすぎない。用事を終えるとそそくさと出て行ってしまうのも当然だった。二人の間に必定以上の馴れ合いはない。

悠はまた一人になるとチーズケーキを一かじりする。甘いチーズの香りが口いっぱいに広がる。やっぱりこの味だ、と感心しながら目は写真へ向ける。その写真には上から下までいっぱいに青が広がっている。

アイス珈琲で喉を潤しチーズケーキの甘味に酔うと笙子の事はなかつたように再びギターの弦を張り始めた。

笙子が訪れた日から一日、悠はいつもの日常を繰り返していた。昼間の間は部屋から一步も外へ出さずに新曲の作詞とギターの調整をするだけ。夕方の涼しい風が吹くとよつやく義足をはめてギターと共に部屋を後にする。

一人向かうのは人通りのない河川敷。昼間は少年野球や散歩にやつてくる人がいるこの場所も夕方頃にはすっかり途絶え悠一人きりとなる。頭上に見えるコンクリートの橋には車のエンジン音が忙しく流れしていくが少年の姿に目を向ける者はいなかつた。

ギターを搔き鳴らす。唄は歌わない。ギターはアンプも何もなしに音を響かせ自由に曲を奏てる。その音を聴くのは人ではなく川の中の魚や草むらに潜む小さな命だつた。

三日という時間はすぐに過ぎた。その間、もう一人の尋ねてくる人物はどういうわけか来なかつた。かわりに夜中になると「今、どうしてる?」「会いたいな」「私は今一人で空を見てるわ」と一方的な報告メールが届いたくらいだつた。その受け取りに使つている携帯電話もまた支給された物の一部である。笙子のほかにも悠を訪ねてやつてくる者はいる。しかしこの暑さにまといつてはいるのか来訪する事はなかつた。

出発の朝は日曜日。青一色、雲一つない穏やかな日となつた。気温もまずまずで時たま吹く風が半そでのシャツから入つてくる。笙子から渡されたパンフレットは明石からの出航となつていて。人ごみに紛れるのが嫌だつた悠は出勤時間で混雑する朝を遅くに出ることで避けてから電車に乗つた。

大阪の鬱陶しいビル群から緑が増えしていく。たつた五分もあれば景色は全く別の物となつた。緑が流れ出してまたビル群、繰り返して変わる景色をぼうつと見つめたまま過ごした。

明石につくと港を目指して歩く。すると青い海、瀬戸内海が目の

前に広がつた。港は日曜だというのに乗客の数が少なく列を作つて並ぶ車もちらほらとあるばかり。笙子が言うほどのものではなかつた。待合場所も十人に満たなようで繁盛している風には見えない。

悠が待合場所に入るなりその人々が無意識のうちに開いた入り口を見る。ギター・ケースを肩から下げ黒のジーンズとロングブーツを履いた少年の出で立ちにすぐに目を逸らした。ミネラルウォーターを一本自販機にて購入すると外へ出た。

中はクーラーが効いていたが悠にとつてみれば自然の風のほうが心地よかつた。幸い影は多く日の下に立つ事はなかつた。どこまでも続くような青天が視界を染め上げる。この場所でギターを弾ければどれだけ気持ちいいだろうかと思いながら空を仰いだ。

しばらく経つと列を作つていた車が動き出す。悠も係員に従つて船に乗る。客たちを乗せた船が汽笛を鳴らして出航する。船の中では椅子が用意されているにも関わらず悠はそこでも風が吹く甲板にいた。懐から貰つた写真を取りだす。撮つた場所とは間逆の位置にいる。橋は巨大な姿を晒しておりその巨大な身体を車が何十台も移動している。それに比べ船のなかはがらがらだつた。旅行客を乗せた船はゆつたりと淡路島を目指して進んでいる。

約四キロもある超大型の橋は微動だにせずどつしりと腰をすえてその場所に存在している。本州と淡路島を結ぶその橋の上を何十台もの車が途切れることなく走つている光景は悠にとつても壮絶なものであまりの大きさに圧倒される物があつた。

列を成して走るそれらにぼんやりと意識は惹きつけられる。大阪で笙子が言つていたことを思い出す。連續して起こつてゐる自殺の現場というのがその橋の中間にある。写真で警察が陣取つていた場所だ。悠は自然とその場所に目を向けるとじっくりと見た。テレビもラジオも持つていらない悠はここへ来るまでに知つた情報は街頭で流れているニュースくらいの物だつた。辛辣な顔をしたキャスターが哀悼の意を込めて話す内容はどれも同じように聽こえた。

自殺の方法は皆、同じ。橋の中央付近まで車で移動すると車を停

めてそこから飛び降りる。残った車には免許が残つており引き上げられた死体も一致していることからその点において不自然な場所はない。これまで自殺した人数は四人。すべての自殺で目撃者が存在している。だが誰も止めようとしなかつたとキヤスターは語つていた。

悠は青い空に目を向けようとして目を持ち上げようとしたが反対に落ちていく豆のようなものを捉えた。橋の中心から零れ落ちたその点は足元に広がる海へ一直線に向かっていく。ただその場所から下に向かつて落ちる。

最後、悠の瞳にだけは海に落ちる直前で白い靄が見えた。

「……五人目か」

豆だと思って見ていたものは間違いなく人間だ。おそらく海面に衝突した瞬間に死亡しただろう。橋の高さを考えれば生きて上がる事は万が一にも有り得ない。海面に衝突した時点で死亡は確定する。口にした直後、背後で悲鳴が聴こえた。

甲板に出ていたのは悠だけではなかつた。スーツ姿の女性が一人そこにいた。彼女もまたさつきの飛び降りを見ていた。顔が青ざめてスカートから伸びた細い脚は震えていた。それでも悠とは違い彼女はすぐに携帯電話を取りだしている。

それにしてもさつきのはなんだろうか。不自然だ。まず昼間のこれだけ交通量を維持しているあの場所で飛び降りるだろうか。死ぬのなら交通量の低い深夜を狙えばいい。それとも誰かに止めてもらいたかつたとでもいうのか。

理由はわからない。

「ね、ねえ。君も見たでしょ」

電話を終えた彼女が悠に向かつてやつて来る。笙子とは違つ長いポニー・テールが風で煽られてよく揺れている。

「見たよ」

「君、なんとも思わないの?」

あまりにも関心のない言い草だつたため顔を覗いてくる。前髪に

隠れた悠の瞳は黒を映し出し中心に青い点を映していた。人の目とは変わった色だったが女性にはその色を見ることが出来なかつた。ただ関心のない瞳だけを彼女は見た。

「そんな言い方つて」

「なら落ちるとき白い靄は見えた？」

「なんのことよ？」

無関心な少年の言葉に対しどこか怒りにも似ている口調でもあつた。それほどまでに悠が無関心に見えていた。事実、彼に自殺を図る人間に情は持ち合わせていない。

どれだけの事があつても自ら命を絶つのは許せない。

「別にあんたが気にするようなことじやないか」

よほど気に障つたのか、かつとなつて目を見開いた。怒る彼女を見て悠はよく見れば綺麗な人だなと感心する。しかし他人の生き死、それも自殺に首を突つ込んでどうしようと言つのかと冷めた気持ちも同時に湧く。田の前にいる女性にはさつきの死が飛び降り自殺以外のものには見えていなければ、と心中で思つばかりだつた。

「そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ」

怒ることをやめて女はそう言つた。一人とも口喧嘩などしている場合ではないと距離を置く。

無言のなか、橋の上では停まつた車を見つけているはずと思つ。じきに警察がやって来る。なにもここから連絡する必要もない。笠子からの連絡では橋には一日数回の見回りが出でいると知らせもあつた。海に落ちた人もすぐに引き上げられるだろう。

「気にしないさ。僕はあんな死に方はしない」

素気なく返す悠。女から目を背けて海と空が広がる光景を視界に入れる。

(さつきの白い靄……あれは……)

これまでの半年で嫌と言つほど見てきた靄と同じ形をしている。もし彼女にそれが見えていたなら少しはおかしいと言つはず。なの

にそれはなかつた。だとするならとギター・ケースに意識を促す。ケースの中で張り替えた弦が撓る。笙子の感はどうやら正解だったようだと意識が高まる。

「私、行くわ」

悠は答えなかつた。自分のするべきことを捉え見つめる先には青が広がる。潮風と太陽が交差し目的の島が前方を埋め尽くす。

（そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ）

さつきの言葉がなぜかよぎつた。彼女の言葉に想いを巡らせたが自分のために悲しんでくれる人がどれだけいるだろうか。

まあ笙子さんくらいは損をした程度には思ってくれるだろうけど。それだって損得勘定でしかない。律先生に申し訳ないとも思うかな。返事の返つてこなかつた彼女の表情は曇つていく。しばらく橋の方を見て船内へと戻つて行つた。

橋を後にし淡路島に近づくと船が一度大きく揺れた。ケースの中でまたギターの弦も揺れる。もう一度、笙子の感に間違いはないと確信する。

かなり距離はあるが現場を見られたのは好都合。ギターの弦が震える様が手にとつてわかる。あれが本人の意思で行われた自殺ならこうはならない。ギターを取り出す。遅かれ早かれ必要になる。あれは笙子さんじゃだめだ。いずれ白い靄は物体となつて現臨する。久しぶりの大仕事になるかもしねりない。

船は一度大きく揺れはしたもののその後はたいした揺れは無かつた。大きさは違つたが誰も異常に思わなかつた。何より無事に淡路島の港へと到着した。潮の香りが散漫した漁港が続く。見上げると大きな山が視界に入る。民家はまばらでアパートやマンションのような集合住宅は見られない。

「遅かつたじやない、悠」

港、といつてもコンクリートの駐車場が広がるばかり。その駐車場のはずれ、送迎用の列から笙子がやつてくる。随分と待つていたようで手にはペットボトルがあつた。中身はもうほとんど無いみたいで容器の中で跳ねている。彼女は田舎でも黒のスース姿で悠を迎えた。その姿が周囲とかけ離れていた。

「おかげで一つ見れたよ」

「こつちも連絡を貰つたわ。もう警察が動いている、あら……イザナギの子が一緒に乗つてるはずだけど知らない？」

周りを見回す。悠の背後に近づく一人の女に向けられた。悠が振り向くと女があつと驚く。さつき甲板で話していた人だつた。驚きの顔はしたもののすぐに仕事の顔へと変化する。

「笹塚笙子さんですね、イザナギより参りました。四条彩です」

魔術師が仕事の依頼を引き受けける際、事件の報告と現地での行動

を支える特派員がいる。毎回、地域と事件の内容によって特派員は変わる。これまで笙子が出会つてきた彼らはかなりの数だったが四条彩とは初めてであつた。

「はじめまして四条さん。」しつちは私のパートナー長瀬悠よ  
ちょこんと頭を下げる悠。

「さつきの……」

再び会う一人。甲板でのやり取りに四条が先に謝つた。上下関係は彼ら魔術師たちのほうが上になる能力の有無が一つの壁を作つてゐる。、悠からすればそんな事はどうでもよかつたが彼女の場合、そうはいかない。

「さつきはどうも。長瀬悠です」

「うそ、若いって聞いてましたがまだ中学生じゃないですか」確かにそう見える。年齢もばっちりあつてゐる。生い立ちを知らないなら当然。しかし本人はもうこの手のことには慣れていた。

「大丈夫よ。イザナギだつて悠の力は認めているし何より今回の相手は私より悠のほうが良いはずよ。ねえ？」

笙子も今回の件を気付いていた。悠へと視線を動かすと言葉の意味を理解してうなずいた。今回は魔術師に出番はない。必要なのは別の力である。

「それじゃあ、海月荘へ行きましょう」

「それどこ？」

「現地の協力者が用意した元民宿よ」

送迎用の車が作る列。その中の一台、一番みすぼらしいワゴンR。タイヤ周りは泥まみれで随分と洗つていないので付着した汚れを全体に纏つてゐる。そのワゴンRの傍で男が立つてゐる。三人が近くと小太りの中年はタオルで汗を拭きながら礼をした。

「どうも遠いところを」

「現地協力者の田高さんよ」

「イザナギの四条です。いつも協力ありがとうございます」

四条の礼に伴つて悠も礼をする。魔術師のサポートは大半が一般

人である。都市部だけでなく離れた地方にも多くいて彼等の仕事に携わっている。といつても魔術師たちのサポートは寝床の確保や物資の補給などで直接戦闘に関与することはない。それぞれの役目をまつとうするためにはいるのだ。

日高の車に乗り込むとワゴンRはタイヤを軋ませた。軽い三人の体重でもこの車には非常にきついものだつた。しかしながら小さなワゴンRの中は冷房が効いていて涼しい。空からの光を遮るものもないこの場所では最高の場所となる。コンクリートの港を出て海を横目に車は走る。窓をほんの少しだけ開けると潮の風が車内に入り込んでくるのが心地よい。

「見てきたんでしょう」

助手席から後部座席に座つてゐる悠へ振り向きながら笙子が言った。車内全員、なにをと聞く者はいない。悠は首を縦に振る。

「どうだつた？」

笙子も見当はついているのだ。

「不自然だつたよ。これまでの自殺がどうか知らないけどあれは……」

「妖魔だつた。それもかなり大きいよ」

につこりと微笑むと身体を前に向けて話を続ける。

「まだ実体化は先だよ。でも放つておくとまた死人が出る」

「これまで自殺した人たちの経歴を調べるといくつか面白い点があつてね。それについては話すほどのものじゃないけど聞く？」

「べつに聞きたくないよ。それにもつと近づかないと解らない事が多すぎる」

落ちる様だけを見ていたに過ぎない。だが現場で見た白い靄。隣りで話を聴いている四条彩には見えなかつたあの靄こそがこの先、何が起きるか予想できるひとつである。あの靄はいづれ実体となつて現れる。

「さつそくで悪いけど現場を見たいんだ。船は出せる？ 小さいやつでいいんだけど」

言い切るとちょうど車が停まる。信号は赤だつた。港から続く小さな町がすぐ傍にある。今度は運転していた日高が口を開いた。

「そりや無理やな」

一人、一度のきつい関西弁だった。ルームミラーで日高と田が合づ。彼は肘をドアに引っ掛けで信号の色が変わるのを待っている。

「イザナギの仲間から連絡が入ったんやけど、さつきの被害者を引き上げるとか何とかで漁師も一般人も船はだされへんねん」やはり警察はもう動いている。遺体の引き上げが優先されると言うわけである。

「少し離れていてもいいから、現場が見たいんだ。自殺はこれで五人目、あれが現臨する前に仕事を終らせられる可能性だつてある」あの場所に近づかないところちらも打つ手がないとする悠。

「せめて橋の上に出て現場を見下ろすくらいはしないと……確かな位置さえつかめない」

「無理を言つてはいけませんよ。こちらこないだらの事情といつものがあるのです。イザナギにはイザナギの。警察には警察の、とうぶつに。ですから長瀬くんの事情もわかりますけどこは我慢です」と、几帳面というよりは真面目な返し。

「四条さんの言つ通り。今日一日くらじゆつくりして明日から動きましょ。必要なものもあるでしょ？ 新しい義足も届く手はずは出来ているわ」

既して待つの一矢張り。悠としてはすぐにでも海に出たかったがそれも仕方なし。竿子は相変わらずのんびりで夏のバカンスを愉しんでいるにすぎない。人の命に関わるかどうかよりも仕事はさつとこなした方が良いに決まつてると悠は窓から映る海に目を向けた。こんな事だから事務所は先になる。そう思つも少年は告げられなかつた。

「わかつたよ」

あきらめるしかないと視線はまた窓の外。大阪とは違う。昼間だ

「どうのに歩いている人は少なく、数人の歩行者も港へ向かってい  
くばかり。誰もが肩に釣り竿を掲げていた。再び動き出すと景色は  
随分と変わって山の中へと入っていく。緑の色が全面に現れてくる。  
橋の姿はまだ映っているが道路の様子は見えない。

「でも驚いたわ、仕事熱心なのね。もつと冷めてるかと思っていた  
わ」

外を眺めていた悠に彩さんが言つた。なぜ、と問うと彼女は口を  
軽快に動かしはじめた。

「だつて船で会つた時、どうでもいいって感じに見えたんです。そ  
れにこれまでイザナギへ集められた調査レポートに載つている悠君  
の人物像を考えるとそういう印象を持たなかつたもので……」

「それもそうね」

笙子が頷いた。彩の手荷物はノートPCが入つたケースとハンド  
バッグ。これまでの特派員も同じように同じノートPCを持つてい  
てレポートを書いていた。悠が何度も見た彼等協力者の姿である。  
彼らたちの仕事は戦闘ではない。あくまで事件の内容を詳細にまと  
める事。そして事件の内容には担当した魔術師やその他の現地協力  
者の事柄も含まれる。その他に事件の終了と共に魔術師たちにも調  
査レポートの提出を要請する。魔術師がイザナギへ提出した二つのレ  
ポートが揃つた時点で事件は幕をおろすことになる。

その後、連盟本部の京都にて事件の内容を鑑定し魔術師の評価へ  
とつながる。

ただ、いつも笙子が引き受けで書いて提出するため悠は自分の事  
をどう書かれているか知らない。またそれを読んだ事もない。

「ちょっと安心しました」

「そう」

やはり素氣ない対応である。後ろに見える港町には活氣はなく人  
気はないようを感じた。事件が発生したため海に出でていた船も戻つ  
ていく姿が見えていた。車の量もやはり大阪とは比べ物にならない。  
車はゆっくりと山を登つていく。およその入る場所ではない山道

を車は登つていいくことになる。地面も整備されていないからガタガタと揺れて下を噛みそつになるほど。

車内から後ろを見ると青い海が姿を現れる。ほぼ一面、青でその下にうごめく影がいることなど思えないほどに清く美しい光景だった。

橋の姿も捉えることが出来る。橋の下の現場へと船が向かっていた。港へ向かつて戻る船とは違い、一隻のボートは橋へ密着するように視界から消えていった。おそらくあれが警察の船だらうと見る。あと一時間もあれば悠と彩が見た死体は引き上げられる。これまで飛び降り自殺で死亡した人間は発生から一時間以内に見つかっている。どれも橋に身体が引っかかるようにして浮いていた。

一度、大きく車体が揺れて全員がどつと浮いた。

「着いたで」

日高は語尾を大きく強調するような物言いをして車を日陰に停めた。悠が視線を前に向けると雨や泥で汚れた看板に海月荘なんとか読める名前が書かれていた。

「ここが海月荘なの？」

「そうよ。どう？」

どう、と言われても見えるのは車二台分の駐車場……もとい木によつて出来た日陰。先に停めてある一台は軽トラック。軽車一台で埋まってしまっている。まあ起用に動かせば軽トラックも出られるだろうという程度。

山中を無理やり切り開いたような場所には一軒の家が建っているに過ぎない。日陰から家までは歩いて数歩程度の距離しかない。家も木造で古い。溜め息が自然に出るほどのボロさである。

「どうもこうもないよ。なんだ、いい物あるじやないか」

車内から出ると軽トラックの一台に水上バイクが目に入る。黒く鈍い光を放つまさしく新品。それはこの場所において一番、新しいものだった。

「用意してもらつたのよ、一人しか乗れないけどスピードもでるわ

「最新式だからはつええぞ」

にやりと笑つて玄関に鍵を差し込む日高。こんな場所に鍵をかける意味は果たしてあるのかと疑問もある。外の熱さは変わらない。だと言うのに家の中は涼しく風が吹いていた。悠の部屋とは別物で風は途切れず熱も籠らない。

「よかつた、窓を開けといて正解だつたな」

すると「でしょ」と親指を立てる笙子。「ここの一階で待つてたんだから」と中へ入る。狭い玄関をくぐる。靴はなくここには日高さん以外にはいないと知らせていた。

「さあさあ上がつてください。どうせ誰もいないんで気楽にしてくださいよ」

すでに三人は階段を登り始めていた。全員、手荷物は少ない。悠も唯一の荷物であるギターケースを持つてあがる。木造の階段はため足を進めるたびに床がきしむ音が出る。古い建物だというのは外から見ても解る通りだった。

「壊れかけどるところもあるんやけど大丈夫やで。床が抜けんないから」

ぎしぎしこと音を立てながら一階へと進む。海月荘のなかは太陽の光を漏らさぬようにどこもかも輝かせている。古いというが埃はなくこまめに掃除をしているのが良く解る。

階段を上ると左右に部屋が分かれている。家の中心にある階段はまるでセンターラインのように設置されていた。廊下は短く両方の部屋は話し声が聴こえるほどであった。

扉は閉められていなかった。左の部屋には笙子の荷物が置いてある。

「悠はそっちの部屋ね。四条さんは私と一緒に

彩が「はい」と元気よく返事をする。そのまま後ろに回ると彼女の肩を掴んで部屋へと連れて行った。そういえば悠は笙子の後ろ姿を見て思う。笙子は男女関係なくモテる。どういうわけかイザナギの特派員には彼女のためにと自分から名乗りを上げる人がいると

聞いたこともあつたほど。普通、魔術師は気難しく相手をしたいとは思わないはずなのにだ。

「そんじゃわしらも行きましょ。」こちですよ

わざわざ案内する必要もないところに田高は悠の前を歩いていく。ようやくやって来た部屋は殺風景なハザ間。一人でいると広いと感じる部屋には小さな机と布団だけが用意されていた。押入れもあるが使う必要はなさそうだ。

丁度、陽の光から外れた角がある。ギターケースをそこへ置くと全て終わる。荷物は唯一このギターケースだけ。隣りにある窓は開いており風が流れ入ってきていた。大阪と違つて潮の香りがする。あのコンクリートの焼け焦げるような匂いはない。しかも先ほど車から見えていた明石の海が広がっている。絶好の場所だった。

「それじゃあ、わしは一階にいるんで落ち着いたら来てくださいね、美味しいお茶もあるんで」

部屋を出て行く田高に「はーい」とまるで子供のように笙子は手を挙げて答えていた。彼は笑いながら一階へと降りていく。また階段の軋む音が聴こえる。

一人になつたといつても廊下の先にある笙子たちのいる部屋は丸見えだつた。彼女たちからは窓の外を見る悠の後姿が見えている。外の風景から机に目を向けた。これまでイザナギの関係者がここを使った痕跡は随分と残つていた。机には引き出しがあり中にはたくさん紙が入つていてめいっぱいに文字が書かれている。おそらくこの部屋で様々な計画を練つた証明である。ここで仕事をするのは初めてというわけではないのだ。

魔術の専門知識は少ない悠でも解るほど奇怪な文章と文字だつた。それらをしまつて再び外を見る。海に出ていた船が動き出していた。あの警察の船だつた。橋の影から出てきた船には白い布のようなものが敷かれていた。そのまま明石のほうへ向つている。どうやら警察はさつきの遺体を見つけたようだ。

海月荘の一階には風呂と台所など一般家庭と変わらない設備がある。しかし民宿としての施設らしき物はこの建物ぐらいな物であった。木造であるが部屋は多く一階には他に部屋が三部屋ある。どの部屋も八畳ほどあり団体を迎えても問題なさそうに見える。

事件の内容を聞くために四人は茶の間に集まっていた。畳張りの部屋は広く四人いても半分も埋まらない。悠の住んでいる部屋と違いかなりの大部屋である。彼らのほかには一時代、昔の雰囲気のかでノートPCとプリンターが存在している。

「どの人物も橋の中央付近まで車で走行し、そこから飛び降りるといった行動に出ています。遺体の回収はされているようですが中には損傷が酷く本人確認が非常に困難だった人もいるようですね。ですが車の中に免許証が落ちていたり本人が所持していたりと手がかりは豊富だったと報告されています。ああ……また精神的に病んでいた方もいますね」

わんさかと情報がプリントアウトされていく。イザナギのほうで回収したデータが机で広げられていく。履歴書のよう[写真と経歴]が記載されている。四条彩のPC内にある情報は彼女の性格などおり几帳面であった。一枚を手にとって見るが特に変わったところはない。悠の見ているデータは大学を出たあと一般企業に就職したとされる男性のものだった。備考の欄には借金で苦しんでいたと書かれているが返済が滞ることもないと記されている。

「自殺全てが奴らの仕業じゃないよ。絡んでいるのは間違いないけど別の何かがいる」

「わかるの？」

「なんとなくね、妖魔があんなふうに気取らせるなんてのも珍しいんじゃないかな」

現場に出ればもっと確かに事が解るという考えに違ひはない。笙

子や悠が奴らと言つるのは誰であろう事件の首謀者にして元凶。妖魔と呼ばれる怪物。今、ここに笙子と悠がいる理由。

「別の何か……まさか魔術師が絡んでいる？」

「ここへ来た時からあの場所を日に三度は見たけど魔術式の類はないわ。そつちは私が保証する。なによりあれだけ巨大な橋になるとそれ自体に必要となる魔力も膨大なものになるわ」

明石海峡大橋は全長約4キロ。日本でも最大クラスの巨大な橋。それも地上から離れ海の上という立地条件。いかほどの魔術師といえどこの場所を意のままにすることは不可能に近い。

「まして特定の人物を誘い出して自ら飛び降りるようにして思つたらとんでもない力になる。網を張るなら一人ではなく複数で行なう必要があるわ」

笙子自ら魔術師の存在を否定する。「ちらへ先にやつてきていた笙子が何もしていないはずも無い。彼女にできる事は全てしている。「それでは一体？」

悠は「さあね」と呟いた。何がどう絡んできているのか詳細は不明で手元に集められている死亡者のリストも今のままで意味がない。自殺というのは人目に付かない場所を選ぶのが普通だ。人知れぬうちに山に入つたり崖から飛び降りたり。最近では集団自殺もあるようだが今回の件は違つ。何よりあれだけ目立つ場所で飛び降りるのはどうだろうか。学生なら馴染みのある学校の屋上から飛び降りるということもありえるが被害者はどれも社会人。しかも中には毎日のように仕事で通行するだけの人物もいる。彼らにとつてあの橋は日常の道でしかない。そのような場所でなぜ死ぬのか。答えは出せなかつた。

「なんであそこを選んだのかな」  
何気なく声が出ていた。

「解らないわよ、死にたいけど止めてほしいって人もいるでしょうし。そういう人からすればあいつた人の行き交いが多い場所は絶好の場所になるんじゃない。普通なら、ね」

橋の上は高速道路になっている。もしあの場所で飛び降りようとしているのを目撃してもそこで車を停めてわざわざ飛び降りをやめさせようとする人間がどれ程いるか。考えてみてちょっとした絶望を悠は感じた。走る車の速度は八十キロ以上の高速だ。他人の行動に気を回す人は少ないだろう。

実際、五人の飛び降りは誰も止めてはいなかつた。

鬱そうとしたなか、日高がテレビをつける。まだブラウン管の箱状モニターが映したのはここから少し離れた場所だった。橋の上からへりで撮影している。一階に出れば窓から見える景色とそつくりだつた。アナウンサーの声がテレビから流れてくる。

机の上ではこれが限界と三人もテレビからの情報を耳を澄ました。画面には海が映り橋の下で警察の船が移動しているのが見える。その映像の中、黒い影がぽつりと映り込む。笙子と悠だけが解るものだつた。日高と彩は何事もなく見ている。

橋にはガードレールの傍で停車している車が映っている。死亡した人物の車だろう。黒い影はその車からすぐ傍で濁りのように染み付いている。カメラが離れる瞬間、その影もまた移動する。

事態は急を要する。携帯電話を取り出した彩がイザナギへと連絡する。話しの内容は詳しくする必要はなかつた。画面に映る情報を見ていた人物はここ以外にもいる。電話の先も同じ映像を見ていた。「それではお願ひします」

彼女が話を終えると悠たちに言つた。イザナギは今晩一艘の船を現場近くまで出す。妖魔の出現は関係なくあれを止めるというのだ。先の飛び込みから一時間もなく一人目が飛び込んだ。この後、橋は厳戒態勢となる。

「せめて慧が来るのを待つてほしかつたわね」

笙子が言つ。遅かれ早かれ悠の頼みは叶えられる事となつた。でも海に出られればそれで事は済む。

大事なのは相手と同じ場所に立つということ。  
人ではないものであつても。

四人は船が出るまでの間、それぞれ適当に時間を潰す。時間は三時間。悠は一人、麓まで降りてみたいといって出て行く。青一色だった空はねずみ色の雲が覆い被さつてきていた。降らなければいいがと願うがそれは無理なようだ。

道に出ると港を目指して歩く。突如として携帯電話が震える。取り出すとメールの受信だった。開くと「台風が近づいてるよ」と短い文章が現れる。

「大丈夫、解つてるよ」

空を見上げて呟いた。昼間、ここへやつてくる時の青天は既に消え空の半分はすでに雲でいっぱいになつてている。いつ雨が降りだしてもおかしくはない。ようやく着いた港には波が押し付けていた。風は強く吹きこれから出来事を物語ついているかのようでもあつた。夕方になるとともはや太陽の姿はなく雲が世界を覆つっていた。遺体の引上げ作業を終えた警察は海から姿を消して今は対岸にいる。橋の上では停まる車がないかずつと監視が続けられている。曇天となつた空はいつ降り始めるのか、船が用意されるなかで悠は見つめていた。黒と灰色に覆われている不吉な色をしている。波は高く周囲には悠達以外に人はいない。嵐の前の静けさに皆、危険を感じて家に籠つている。空が曇つてきた頃、丁度悠が港に出た時にイザナギ本部からという名目で明石から四人乗りの船を一艘をやつてきた。海月荘にある水上バイクでは一人しか乗れないためこちらにする。少し竿子が落胆していた。彼女の場合こういった船よりバイクで颶爽と走りたかったのだ。とはいえ一人を乗せた船はぐんぐんと波を搔き分け進んでいく。海の青は雲の濁りを受けて黒く光を失つていた。船の舵を取るのは日高である。彼は荒れる海を速度を保ちつつ殆ど揺れさせずにいた。

「さすがですね」

髪を抑えて先頭に立つ。風も水しぶきも全て受けながら彼女は言った。

「俺も昔は獵に出とつたからなー」

一般の船、それも五人も乗ればすぐに誰かがはじき出されそうな大きさをしている。加えて海の荒れは益々強くなるばかり。橋の付近へ近づくのは危険だと知りながら、ゆっくりと近づいていく。笙子と違つて悠は足元がおぼつかない。なんとかボートから振り回されないようにとしがみついている。

「弦は震える?」

気付かなかつた、笙子は悠の脚よりもその力へと目を向けていた。無理もない。笙子は悠になにも問題ないように見えていたのだ。ギターは港から出る前にケースから出している。そのギターには全くといつていいほど反応がない。首を振つて伝える。耳聞、ここを通つたとき弦は確かに震えた。今は波とは正反対に落ち着いている。少年の心は震えていた。

「もっと近づいて」

言葉どおりにもつと、もっとと船は進んでいく。その度に波はきつくなつていった。すでに現場との距離は十メートルもない。すぐ傍に自殺した人間の身体が落ちた場所がある。首を曲げて見上げれば天空まで届きそうなほどに巨大なコンクリートの柱が立っている。ギターに相変わらず反応はない。船に乗つてやつてきた時、ここから随分離れていたが感じた気配はなかつた。単にここには居ないという事なのか、少年の瞳は周囲に向けられた。

一度、船が停まる。気を静めて、ギターを構える。足を踏ん張ればどこにもつかまらずに立てるようだと瞼を閉じた。心を落ち着けてそつと相棒を抱く少年はその意識を海底まで落とす。

瞬時に僕の魂が弦を震わせた。

「やつぱりいる

ボディに流れる赤がじんわりと光を帶びていく。悠の鼓動とギターの鼓動が同調する。船の周囲には物体による衝撃ではない自然のものとは違う波紋が広まる。膝から下の義足は意としないところで耐えていた。震えが膝に伝わる。しかし意識はもつと下に落ちていく。すでに少年の心はここにない。

膝から義足へ、義足から船へ……そこから蒼い海の底、黒い闇の底。

意識の落ちる先に波の「うねり」はない。海底は非常に穏やかで船のある水上とは違っている。身体が自然と動き指が弦に触れる。どんな音かはさして重要ではない。鼓動にあわせて音がなる。単なるひとつつの響きが連續で鳴りリズムを刻む。

「はじまつたわね」

ギターの音はアンプなど一切の道具をなしに奏でられ音はまるで空気を背に反響する。波の音など全てかき消すしなやかに彩られた音。途切れないうように紡いでいく。指は思考とは別のところにある。「この辺りを回ってみて」

弦は指とは別に揺れている。だが一向に目的のものは見えずについた。船が再び発進すると瞳にぼんやりとした蒼が浮かび上がる。いつもと同じだ、問題はない。

海の中では魚がこの場所を避けている。一切の生命が消えた。場所はあるている。そう全ていとも通り。だが義足に違和感が走った。無機質な單なる物がひびの入ったような崩れた音を立てる。いつもという全てが一瞬にして崩れさつた瞬間。

それこそが発端だ。

同時に船に振動が起きる。岩にぶつかつたような激しい衝撃。繋いでいた意識が完全に途切れる。海底から海上まで一瞬で戻つてくる。並行であつたはずの目線はゆがみ右側へ傾いていた。身体から義足が外れている。そればかりかはずれた義足ごと悠の身体は船の上にはなかつた。

「悠！」

宙に放り出された悠がよつやく事態に気付いた時、笙子は叫んでいた。手を伸ばしていた彼女の姿から遠ざかる。悠は自分よりもギターを優先して放り投げる。手から放れると赤く宿つた光は消えていく。笙子がギターを手にしたのを確認できただけまだマシだった。義足から離れた身体は襟を掴まれる。強力な力だが姿は見えない。

力で無理やりに引き込まれる。悠の身体は軽く貧弱である。肉体面においては外見同様少女並み。その力に抗うことなど出来なかつた。

笙子と目が合つ。その後、瞳は蒼に包まれた。

冷たい海水に身体が溶かされていくような感覚ただ引きずられて底へと落ちていく。今度は意識だけではない。身体も一緒だ。義足が外れていたのは幸いだ。再び海面に上がるなら腕だけで泳がなくてはならないのだ。義足が付いたままだつたなら重くてとても泳げない。悠の目には義足が落ちていく様が見えた。海底の底にある砂がふわりと巻き上がる。

最後の一瞬で吸つた空氣も長くは持たない。まるで錘のようになつた悠を落としていく。誰かが引き上げない限り悠は海面には戻れないだろ。なら、と瞳を凝らす。先の事がある。必ずいる。

「さあ一緒になりましょ」

ここは海底、魚一匹いない。深き黒の世界。上から見れる青い海など存在しない。ましてや声などかけられるはずもない。

「かわいそうな子……まだ若いのに」

人が言葉を話せるはずはない。なのに悠の前に現れた女は声を出す。

全身が蒼のなかでもはつきりとわかる。長い髪は足の先まで伸びていて半身は焼け焦げていた。顔は青ざめて頬の肉が削がれたようになくなっている。そのくせ瞳はやけに美しく生きているような輝きを見せてくる。

「あなたも一緒になりましょ」

脳に響く声だった。そればかりか黒く燻つた腕が伸びてくる。悠の瞳に恐れはない。腕に掴まる前に息が持たなかつた。空気を求めて口が開く。しかし入つてくるのは海水ばかり。すでに意識は朦朧としていた。

少年の身体は限界を迎える。吐き出した息の泡が昇つっていく。薄れていく意識の中、遙か空へと伸ばした腕を女が掴んだ。半身が焼け焦げた女ではない。まさか実体であり生きている女の手だ

つた。暗闇の如く光のない海底で人の暖かみに繋がれた。だが掴み返す力などなく悠は意識を失つた。

溺れた悠を拾い上げて数時間が経つ。海はますます荒れ雨が降り風は強くなっていた。台風の余波はすぐそこまで迫ってきていた。

海の底へと落ちていく悠を引き上げた時、意識はなかつた。僅かな時間ながら悠の身体は芯まで冷えきついていた。笙子は日高と分かれ一人、海月荘へと戻った。倉庫からストーブを取り出すとすぐに悠を暖めた。外傷はないように見られ死を免れたが意識は戻っていない。今はただ静かに眠っている。

「手間のかかる子……」

眠りについている悠の額をさする。

「笙子さんは大丈夫ですか？」

海に入ったのは一人ではない。海底近くまで追いかけた笙子もまた同じ。シャワーを浴びてきた彼女に四条彩は茶を淹れて待つていた。海に残った日高はまだ船を港にしまっている。今、海月荘には彼女らしかいない。そのためか、笙子はバスタオル一枚で過ごしている。

「私なら問題ないわ」

腰をおろすと無防備な身体がふんわりと揺れる。彩は彼女の身体から視線を外した。同性でありながらもその色香に頬が赤くなるほどに笙子は魅力的であった。しばらくはラフな格好でいられる、という安易な考えが周囲を惑わせる結果になる。

「でも悠が意識を取り戻すまでなにもできないわね。義足も落としちゃつたみたいだし」

義足は海の底にまで落ちている。悠を助けた時、義足は後回しにした。引き上げる道具もなかつたため仕方がなかつたのだ。回収するには台風が過ぎ去るのを待つしかない。それには二日以上かかると見られる。荒れた海の中で回収など出来るはずはない。

悠の容態は変わらない。笙子は服を着ると彩と一緒に一階へと降

りていった。居間へと移動するとテレビをつけた。ちょうど気象情報が映っていた。現在、兵庫県南部に迫っている台風はあと二時間ほどでその暴風圏に入ると言われる。テレビではレポーターが徳島で暴風の中、実況していた。

「強そうですね」

「早く通り過ぎるとと思つたんだけどね、やつぱり当てにならないわ」「眩く彩。あの台風が去るまで義足の回収は不可能だ。笙子が引き上げる時も海は逆巻き喰つっていたのだ。とても船を出すことさえできぬ」。

「でもどうするつもりですか。悠君が事件を解決させると云つながら足は海の底ですよ」

「代わりが届く手はずよ。それも今向かつてきているわ、台風と一緒にね」

微笑む笙子の前で携帯電話が鳴った。丸い卓袱台の上で震えて小さな地震のように揺らした。黒のメタリックカラーの一いつ折り型。鈍く光り青いデジタルモニターが相手の名前を表示していた。

「どうしたの」

携帯電話を手に持つと開いた。名前も告げずに言った。

「悠の電話がおかしい。なにかあったの」

笙子には誰からの連絡がわかっていた。穏やかといつよりも静けさよりも冷靜すぎる声だった。まるで氷のような冷たい刃物みたいな音で女、時雨は言った。

「鳴らなくて当然よ。海に落つことしちゃったんだから」

「あれほど氣をつけろといったのに……悠は？」

「寝てるわ。起きたら連絡させましょつか？」

しばらくの無言の後、「しなくていい」と告げて通話が途切れた。

笙子は耳元から電話を離して液晶の画面を見る。待ち受け画面へと変わった液晶には黒い髪をした背の高い男と一緒に映った彼女がいた。まだ笙子は幼く学生服を着ている。男のほうは片目を隠すようにな長く伸びた髪をしていた。

「例の？」

その問い合わせに頷いてみせる。

「あの子も心配なら来ればいいのに」

「確かに今日は定期検診ですよね。先輩達も言ってました」

あつと思いつ出してハハハと笑う。笙子の周りには三人の協力者が集っている。一般的な魔術師として普通。一人は二階で寝ている長瀬悠、さつきの電話をかけてきた冷たい印象を与える女、時雨。そして最後はここへと向かっている織戸慧。全員、魔術師ではない。しかしながら彼女のサポートを確実にこなす者達である。

ただ一人、時雨だけは別である。彼女は人ではない。関西魔術連盟から定期検診を常に受けることを約束に行動を許された人外の類である。

「イザナギのレポートでは悠君はいつもこういった意識障害に陥るようですね」

彩は再びパソコンを広げていた。モニターには長瀬悠のデータが映し出されている。その一箇所、彼女の言う通りで事件の途中で大半、悠は気を失っているという報告が記されていた。特に今回のようなケースでは必ずといっていいほど。

「私、今回笙子さんと仕事をすると聞いて悠君のレポートを見て思つたんです。この子は危ないって……笙子さんはいつも傍にいて大丈夫だと確信されているのかもしれませんがあまりにも」

「危険よ」

言葉を先に言つ。彩の表情は険しい。解つてはいるなら止めると言いたげな顔をしていた。悠の担当した事件のレポートを見れば皆同様に彼は異常だと云うだろう。事実、これまで協力にやつてきた関係者たちはそう言つてきた。事件に関わる度に何をしているのかと問う連中も多い。しかし笙子はその度に問題はないと言つてきた。答えは簡単だつた。

「彩ちゃんは奏者の仕事が何か言えるかしら」

「当然です。土地神に音を届けてその力を静める。魔の怪物たちを

音によつて浄化する」

キーボードから手を離していた。

「合つてる。けどそれだけじゃ足りないわ」

首を傾げる彩。現代の魔術師の傍には必ず協力者がいる。その協力者が同じ魔術師であるかどうかは別だが個人で動く者はいないだろう。関西にいる数百の魔術師たちも皆、笙子と同じように誰かと手を組んでいる。

「あの子はね、他の奏者とは違うのよ。奏者の力は何か知ってる?」「楽器です。それぞれの持つ楽器により音を奏でて力を具現化する術者ですから」

「悠はギターを使用して音を鳴らす。奏者の仕事はさつき彩ちゃんが言ったとおり、土地神の穢れを浄化することや妖魔の浄化にあるわ。相手の魂が何であれ完全に消滅……つまり浄化することに意義を持つ。いわば鎮魂の音色ね。悠が他の奏者と違うのはその場に残つた思念や魂なんかも自分の魂の波長と合わせられるの」

「そんなデータ載つてませんよ」

モニターに表示されている長瀬悠のプロフィールにはやはり書いていなかつた。

「載せる必要がないからね。で、靈感……いえ自然と同調する事ができる能力。だから人間の魂さえ観る事ができる」

「その力は知つてます。随分昔にもいたつて聞きますよ。特別強い力を持つて生まれる人がいるって……」

「魔術師だけが特別じゃないのよ。魔術師ってほんの僅かな素質があれば誰でもなれるのよ。奏者は違う。先天的な力は産まれたときに決まっちゃうから」

少年の身体と心が傷つきながらも成長していく様を笙子は隣りで見てきた。その瞳にはある男の姿が覆い被さったように悠の姿と酷似している。

「で、その力を持っていたっていう人は長瀬律」

「一人の男の名前を口にした。

「あの子が危険に身を投じてているのは解つてゐるわ。でも誰かにしろと命令されてやつてゐるわけじゃない。あの子は父親の言葉を守つてるだけよ」

彩が悠のプロフィールを次へと移した。その頁にこれまでの経歴が全て記されている。もちろんその中には笙子が悠を引き取った日付も載つていた。

「悠君には父親はいなはずですよ。保護者は……長瀬律となつていますが彼とは血がつながつていません」

「そこよ。血の繋がりなんていらないのよ」

長瀬律は身元引受人であり父親ではない。悠は捨て子、親知らずである。まだ赤ん坊だった頃、ある教会の前に捨てられていた。幸か不幸かその教会はこちら側の世界と繋がりがあり悠は授かつた力とともに進む道を決められたのだ。

奏者としての素質がなければどうなつていたか解らない。

「そ、それは笙子さんも同じ……ということでしょうか」

「私の場合は感謝ね。私が高校を卒業するまで大事に育てくれたことへのね」

彼女もまた同じようにして育つた一人である。親がいてもその人に育てられるかは必ずではない。笙子を育てた人物は親ではない。

「悠の大事にしているものはそんなものじゃないわ。もっと根本的な根源にある。つまり魂の浄化。自然への回帰とも言うのかしらね」

「わたしには解りません」

モニターの中の悠は無表情で冷たい瞳をしていた。

「彩ちゃんも悠のギターを聴けばすぐにわかるわ。どれほどあの子がどういう子かということ。さて慧に連絡しなくちゃね。何所まで来てるのかしら」

再び携帯電話を手にするとメモリーの中から織戸慧といふ名前を呼び出す。携帯のメモリーはすでにいっぱいになる手前まで記憶されていた。グループ別に別けられたメモリーのなか慧の名前は長瀬

您と同じ場所にあつた。

悠が膝から下を無くしたあの日からまだ半月ほどしか経っていない。それなのに面倒なことになった。義足の注文は金が掛かつた。数少ない奏者を危険に晒し肉体の一部を破損させたことは事務所設立を遠ざけた。時雨という強力な仲間が加わったが彼女も気ままに動く。笙子の目的は指の隙間をすり抜けるように遠退いたのだ。

今回注文した義足は海底に沈んだ物とは全く違う。単なる足の代わりではなく戦闘用のもの。連盟の所有する技術と魔術の結晶。一般家庭で普及しているような代物とは違っている。単なる物体として活動するのではなく、文字通り身体の一部として活動する。身体に装着した時点で痛覚、触覚も働きだす。地を踏めばその感触は脳へと伝わるし、切られれば血は出ないが痛みは感じる。本当に身体の一部として機能を果たす。

そうした義肢を作っているのは笙子と同じ魔術師である。

魔術師の本分は戦闘にあらず。

魔術とは人為的に奇跡、神秘といった非科学を使用することにある。隣りでパソコンを自由気ままに操っているのとは訳が違う。使うものは自然界に存在する力と魔術式。それらを駆使することで火を燃やし風を起こす。時が経つても基本は変わらない。奏者の持っている先天的な力ではなく、ほんの少しの才能と努力である程度のところまではいける。笙子自身がその例である。

そんな中、稀に「正に是」という才能に長けた人物が現れる。イザナギで義肢を製作している魔術師は世界有数の魔術師である。協力者の一人、織戸慧は直接イザナギとは関係ないが京都にある本部と繋がりある家柄から彼やそのほかの魔術師と面識があつた。普通ならば世界有数の魔術師と直接会うことなど到底不可能だ。その会う事さえ困難な者達は自分の工房となる事務所の設立を早くに行い独立している。そしてその事務所の場所は内密にされている。

魔術師が方々へ必要な物を新生する場合、自分の所属する団体へ依頼書を送る。団体、笙子の場合イザナギだがそこから今度は連盟本部へと送られる。手間がかかるという意見もあるが古くからそういった仕組みになっているのだから仕方ない。でも時間がかかる事は無く即座に行動に移るため各方面へ連絡が伝わるのは一瞬だ。この辺りは科学万能の時代の進化が全てである。

今やメール、電話、動画、なんでもありとなつていて。すでに現代の一般市民はその機器を手足のように使用できる。使い魔に手紙を持たせて走らせるなんて時代錯誤はない。

イザナギへ新しい義足を発注したのは随分前になる。現在、完成した一品は慧が運んでいる最中だ。台風よりも速く走る彼女のバイクに乗せられた物に期待と不安が募るなか電話をかけた。

「おかしいわね、出ないわ

「運転中なんじゃないですか」

いつまでたつても通話にならない。バイクの運転中なのは知っていた。だがいつもなら路肩に停めてすぐに応対するはずだ。特に笙子からの着信なら呼び出している織戸慧は喜び勇んで受け取るというもの。しかし電話は留守電となつてメッセージ録音へと変わる。なにもそこまでするほどでもないと電話を切ると山の坂道からけたたましいエンジン音が響いてきた。

雨音を書き消す歓のような音は大型バイクのものだとすぐはつきりとする。慧の乗っているバイクとは違つ。もっとバイク 자체の精度が根本から違う精密機器の骨が鳴らす音。笙子の耳には聞き覚えのない音だった。砂利に足をとられる事もなく登つて来たのは赤と黒のカラーで塗装されたバイク。至るところにBMWのマークが入っている。

バイクには黒いヘルメットとライダースーツを着込んだ運転手が乗つていた。その後部には無理やり括りつけた荷物が青いビニールを纏つて風に揺れている。バイクは縁側に停まるとなんとか雨から身を防ぐ事が出来た。

「遅くなつたか？」

ヘルメットの奥で黒い瞳が動く。棘のように刺さりそうな目をしている。ヘルメットを脱ぐと肩にさえ掛けられないショートの髪が現れる。また適当に切つたんだろうなと笙子はその形を見て思つ。

「早いくらいよ、慧」

「急がせたのは笙子だろ？　まったく夜通しぶつ飛ばしてきたんだ、感謝しろ」

外見とは正反対のぶつきらぼうな言葉使い。男のように話す彼女はライダースーツの胸元部分を開く。随分長い間、走っていたのだろうじんわりと汗をかいていた。バイクの後部にあるブルーシートの箱を縛っていた紐を解いた。

「また新しいバイク……それもBMW……」

「親父からの贈り物だ。オレが買ったんじゃない」

不貞腐れるように言うがバイクは紛れもなく新品そのもの。雨のなかを走っていたため濡れているがまだ新しい部品の数々は光り輝いて眩いばかりだ。一台の車をずっと乗り続いている笙子とは全く正反対で愛車へのこだわりはない。

「それよりも、だ。また倒れたみたいだな。何度目だよ」

「数えてないわってなんて知ってるのよ」

「さつき携帯で見た。そつちの四条が報告したる」

「そうなの？」と名指しされた彩に向かつて聞くと彼女は首を縦に振った。彼女の報告はインターネット回線によつてイザナギへと送られる。イザナギは京都の本部へと報告する。その情報が携帯電話という端末を用いて見る事ができる。

「頼んだものはそれ？」

解き終えるとブルーシートもはがす。差し出された物は木箱。両腕の力をめいっぱいにして持ち上げる。箱を置くと中からじっと金属音にも似た重厚な音がした。

「あいつ……やっぱり向いてないんだよ。こつちの仕事」

「そんな事言つてほんとは悠が心配できただんでしょ。上がつて、あ

の子一階にいるわ

二人で箱を持つ。それでも中身は重く腕が肩から落ちそうになるのを堪える。荷物を持って階段を登る。

「で、あいつは？」

「あいつ……ああ時雨ね。彼女なら定期検診よ」

雲に隠れた太陽によつて海月荘は薄暗い。電気をつけて明るさを保っていた。そよ風が吹いているがそれは何時までかわからない。そのうち、この海月荘を吹き飛ばさん限りの嵐となる。海の波も時期に激しくなつていくだろう。昼間の暑苦しさはすでに消えていた。悠の姿を見た慧が「バカ」とつぶやいた。彼女との仲はもう随分と長いものになった。それなのにこの頃はいつもこんな調子で距離を置いている。

一人は悠の傍に箱を置く。

「でも随分と速かつたわね。まさか余つてたやつじゃないでしょうね」

「違うよ、完璧なまでの新品だつてさ。なんでも今回の事件で最高に役に立つって豪語してたぜ」

自信満々なその口調は作つた魔術師のもの。彼女が言つには義肢製作を行なつている魔術師は頑固なおつさんとのこと。イザナギに所属する魔術師又は関係者の技師をすべて一人で受け持つ職人でもあるが誰も会つたことはないと笠子は聞いていた。

「おつさんに渡された物だ。間違いなく本物だよ」

箱の蓋を開けると黒い金属の塊が現れる。義足として頼んだ物だつたがその中に在る物は足の形をした金属にしか見えない。さつきまで一人で抱えて持つてきたが重さは二十キロ以上はあった。そんなものを寝ている少年が履けるわけがない。

「重くない？」

「おつさん曰く履いたら重さはゼロになるらしい」

義足は冷たい鋼鉄で出来ていた。笠子が触れる。その触れた場所から身体が凍りつくほど冷気に晒されるようだった。まるで海に

落とした義足がゴミに感じるほど精巧さを持つていると知る。特に接続部分には魔力の流れをまるで血管のように繋ぐ「コード」が充満していた。これなら悠の力を最大限に發揮させられる。特に靈に掴まれて海に落ちることはなくなるだろう。それにちょっとくらいの攻撃じゃびくともしない。でもこれだけの品物だと値段が気になるところ。

「金だが試作品だから無償らしい」

「ホント！」

笙子の心配を見透かしたように慧が言つた。慧がうなずく。こんないい物がただなんて今回はついてるとはしゃぐ。いつもこの時ほど慧のことをありがたく思うことはない。

「今回の事件だけど」

慧が突然きりだした。腕を組んで窓から外を見ている。窓には大きな姿をした明石海峡大橋がどんと構えている。

「飛び降り？」

慧がうなずく。

「犯人だけど視たぞ。オレならいつでも殺せるけどどうする？」

彩がいつのまにかやつて来て慧に茶を渡す。彼女は珈琲を飲まい。家柄なんか洋風の食べ物には手を出さない。茶の香りに受け取った慧は口に含んだ。

「だめよ。あれば悠のためにいるの」

「なんだって悠なんだ？ あんなのバッサリ殺つちまえばいいじゃないか。その後、後ろに隠れてる奴も一刀両断に……なんでもない」笙子の瞳が慧の言葉を遮っていた。事件の解決という点で言えばこのまま慧が終わらせてしまうのがベスト。何時とも知れぬ悠の回復を待つよりは人が死ななくて良い。見た所、ろくな装備もないが刃物のひとつでもあれば事は足りる。それくらいは常備しているだろうからバイクで行つてそのまま大阪へと行ける位だ。

「海の上よ？」

「問題ないさ、泳げるからな」

でもそれは駄目、と瞳で示す。仕事という名目以上に大事な事がある。悠には一人の男が親として接していた。その男はまだ悠の芽は小さなもので開いてはいないという。魔力のない慧と彩には観えていないが今、悠の周りには胎動する力が渦を巻いていた。その光景を見ているのはたつた一人笙子だけである。

「実戦の経験が少ないだけよ。それに今回のような妖魔相手には奏者が一番適任なの。それぐらいは解っているでしょ」

慧は黙つて肯いた。

「悠や他の奏者が奏でる曲こそ最高の武器になる。私や貴女の剣なんて適わないわ」

今度は窓の方へと歩いていく。まだ海はゆつたりと揺れている。そのうち橋は通行止めとなる。

「特に今回は悠の為になるの。だから慧は手出し無用、良いわね」「わかつたよ。俺もただ暇なだけだし、面白そうってだけだつたら氣にするな」

海を見ながら返答する慧。彼女は魔術師ではない。悠のように能力者でもない。傍にいる四条彩と何も変わらない。ただの人で他より運動神経が少し良い程度の人間だ。この道を進まなければアスリートになつていただろう。彼女の身体はライダースーツの上からでもはつきりと鍛えられている事が見てとれる。そんな彼女が視たというのは連盟より与えられている専用のゴーグルを使って覗いたにすぎない。霊などの実体を持たないモノを見る事ができるのは限られている。

「でも面白いことを言つわね。いつも面倒とか何とか言つて関わることを避ける慧が自分から関わるうんて」

「なんでもない。ただ暇なんだよ」

頬を赤く染める。暇だ、暇だと口では言つてるが実際はそんなはずはない。今日も台風と共に北上し遅早く駆けつけたのだ。

「それじゃあオレは帰るぞ」

一気に手にした茶を飲みきる。湯飲みを彩さんに返した。私の言

葉に返事はない。

「遊んでいいじゃない。仕事ないんでしょ？ もうじき悠の目も醒めるわ。仕事が終わって一息つくくらいの時間はあるでしょなにも急ぐ必要なんてない。彼女に仕事はない。笙子の元にやつてくる仕事こそが彼女の仕事になるのだから。それにここには海もあれば山もある。観光だけでも暇つぶしにはなる。

「生憎そんなものに興味がないし俺がここにいるとあいつが怒るだろ」

それだけ言うと慧は部屋から出て行ってしまった。最後、寝ている悠の髪をなでたのは驚きだった。笙子も同じように悠に触れる。この子を預けた本人は今頃どこにいるんだろうか。私には何も言わないで消えた彼の行方は現在イザナギと学院で調査してもらっているが不明となっている。もう死んでいるのかもしれない。彼に限ってそれはないだろうけど。学院のパレードで聞いた彼の音楽は私の脳裏に焼きついたまま。強烈なイメージと魂を揺さぶる激しさは忘れられない。最後の言葉もはつきりと覚えている。

「悠は俺より奏者としての能力がある。だからお前の力にもなるさ」  
彼はまだ幼い悠の事を理解していた。だからこそ私の元に預けたんだ。私はそれに答えるために何事も力で解決するわけにはいかない。少しでも悠のためになるならと事件の解決は悠自身の音楽で終わらせることに意味がある。

「初めて織戸の方を見ました」

彩さんが言った。古くから続く連盟に織戸の名前は大きく関与している。京都の本部でも織戸家の発言は響く。彼女は産まれた時から定められた人生を歩んでいた。

「あの子も私の仲間よ」

仲間というよりは妹に近いが、とふと思つ。あのクールな彼女がその内側を見せるときは仕事の最中ぐらいなもの。バイクのエンジンに命が灯る。爆音をひっさげてバイクは走り出した。

## 第一章七話

暖かい風を感じて目を醒ます。部屋の中にいることは良く解る。冷たい海の中で途切れた意識はまるで空の上で蘇つたようだつた。窓を叩く雨の音に胸のうちがかき回される。雨音が異常に大きく響いて頭のなかまで叩く様に鳴つていた。

瞼を上げるとぼんやりと天井が見えた。目を動かせば隣の部屋で笙子さんが話をしているのが見える。自分が無事であるということを確認できた。妙な感覚だ、自分の生死を確認するために他の人を捜すなんて。

少年の身体は自由が利かず鉛のように重かつた。腕はある。両腕とも健在、目が動くという事は顔も無事だろう。痛みは不思議と感じることはない。なによりあの海で落ちた時、身体の異常はなかつたのだ。心と意識が吸い取られそうになつた以外に問題はない。ただ、膝より下にあつたはずの義足は見当たらなかつた。

起き上がろうとするとき全身が軋むように痛んだ、はじめて痛覚があるといつことにほつとした。痛みを感じることで生きていると感じる。だが、すぐそこにある階段のように音が鳴りそうなほど骨から痛みを受けるときすがに歯を食いしばる。特に指の先から肘にかけて筋肉が麻痺しているように鈍く感じる。眠っていた頃には感じなかつた全身のひびを逐一得る。

しばらくギターを弾くことは出来ないかもしれないと危惧するが指先は悠の意識に従つて一分の狂いもなく動いた。

身体の痛みは一旦、諦めて部屋を見渡す。

壁に首を持たれかけているように置かれたギターがケースと共に在る。どすボディをもつた相棒は海水に浸かっても尚、その姿を新品种同様に保つてゐる。

(なんだ、これ……)

声は出せなかつた。心で呟く。悠の瞳に見えた物は黒い塊。彼の

瞳には微かに炎を纏つていて見えた。海の中に落ちたとき履いていた義足とは別物だと一目で確認できた。

痛みに堪えながら腕を伸ばす。ギターに触れると忽ち黒に赤が灯る。真紅のような赤は悠の身体と繋がった証である。すると身体の痛みは和らぎ自由が戻る。今度は背を起こして黒い塊に手を伸ばす。触ったとき一瞬だけ痺れる。静電気に似たような痺れが指先から走つていく。その痺れは痛みとこよりも衝撃であり苦しみはなかつた。

そのショックでさつきまで見ていた夢さえも思い出す。記憶のなかにそれは存在していた。はっきりと憶えている。夢のこともあの女のこともすべて。

とにかく黒い塊のような義足を脚にはめなければ立ち上がることも満足に出来ない。足が破壊された半年前からようやく慣れいた義足だつたがと新しい物を装着する。膝の途切れた部分は皮が綺麗に肉の部分を覆っている。義足が触るとざらざらとした生の肉が擦れあつよみうな感触を受けた。肉などないといふのに義足から生えてくるコードのようなものが装着部分で接合をれていく。そうやって繋がつていくのだ。

次第に黒から肌の色へと変わつていく。繋がつた部分にはまるで骨のような継ぎ目と間接が出来上がつていて。それは肌の色をしていて血管もある。外見は本当の脚のようだ。ミミズのような管が刺さるように神経が一体となつた。

「起きたようね、悠」

廊下越しに笙子が言つた。悠の寝ている部屋は笙子の田から一望できる。襖は開かれている。悠が目覚めと同時に笙子を視界に入れたのと同様に彼女もまた同じようにした。つられて彩も部屋の奥から現れる。「おはよう」とだけ言つて足の感触を確かめる。義足はすでに義ではなく正真正銘の足となつていた。

相棒のギターも同じく自分の身体の一部となつていて。傷んだ所はないか確かめるように一度、弦に触れてみる。確かに音が部屋に

響く。重く耳に響いた。破損個所はなく濡れていた部分もない。いつも通りの姿をしている。それでも弦の取替えはしなければ駄目だつた。ギターを握った手に自身の身体に流れる力の流れを感じる。いつも以上にいい音が鳴らせそつだと確信できている。すぐに弦を外していく。ケースの中に入れている予備から取り出す。笙子たちは部屋から出ず、そのまま様子を見るだけだった。

悠のギターは単なる楽器ではない。奏者と呼ばれる能力者にだけ与えられた紛れもない道具。義足と同じで作った人間は魔術師である。奏者は技術者ではない。調整は出来ても直すことまでは出来ない。壊れていれば今頃、橋の上にいただらう。窓の外では大きな音をたてて雨と風が嵐を作り出していた。

弦の張り替えと共に隣から笙子がやつて来る。

「何日くらい寝てたの？」

「一日よ。体調はどう？ もう平氣？」

体力は全快ではなかつた。痺れは取れても身体に溜まつた疲れはまだ残つてゐる。しかし一日という時間の経過が何よりも優先させる必要を作つてゐる。新型の義足のおかげで下半身に負担はない。指が動けばギターは弾ける。あとは自分自身の気持ちだけだ、と力をいれて立ち上がる。

「時雨が電話してきたわ。悠の携帯、海に落ちちゃつてね。悪いけど壊れちゃつたわ。新しいの用意する」

「いいよ、悪いのは僕だから」

「悪いのが解つてゐるならいいわ」

笑つて対応する笙子。彼女は「何かいる？」と聞いた。

「大丈夫だよ。でも……なにか食べ物でもあれば最高だけど腹のあたりをさすると空腹感があつたことに気付く。

「すぐ用意しますね」

笙子の後ろで彩が動いた。隣の部屋では資料が並べられているのが見えた。その資料からさつと離れるとき階段を降りていく。やはり軋む音は鳴つた。

「義足はどんな感じ？　試作品だつて行つてたけど」

脚を上げる。膝から下の重みはない。まるで地上から浮いているような錯覚さえするほど。あの黒い塊だった時とは大違いである。上機嫌な彼女の言葉。いつもなら掛かった費用や面倒でこんな風を言つ事はない。悠はいつもと違つた感じながらもその性能の良さを伝えた。

「いいよ、これ。馴染む」

義足の感触は前の物より自然につながつている。破壊された脚が蘇つたかのように思えるほどだ。以前のように歩くことも出来るだろ？。これなら長時間走り回っても大丈夫だと自信を持つて言える。「さつき事件のことについて話していたんだけど」

「僕が意識を無くしている間、被害者は出た？」

部屋の入り口で壁に背を預ける笙子。首を横に振る。誰も事件に巻き込まれていない。この一日間、誰一人として死亡していない。

「犯人は見た？」

「ばっちりと。笙子さんは見えなかつた？」

「見えたわよ。もう特定できてるわ」

一枚の紙を差し出す。左上にある写真に悠の目は動く。目の下に隈ができた髪の長い女。細く痩せている人だった。あの海の中で囁いていた女とは肉付きが違うが同じ目をしていた。

「この人で合つてる。名前は……高岡美咲か」

海に引きずりこんだのは誰であろう彼女。しかし彼女が死亡したのは五年前と記載されていた。

「これまでに飛び降りて死んだ人たちのファイル見せてよ。その人たちのことも知つておきたい」

今回の事件、飛び降りと見なされたのは五人。

差し出した紙には高岡美咲のプロフィールが載っている。あの海の中で触れた瞬間、悠のなかには彼女の意識が流れ込んできた。その光景はまだ頭の中で再生できる。五人の被害者が死に至る場面も同じように流れる。

笙子が彩と一緒に見ていた資料の中から被害者のプロフィールを手に取り悠へ渡す。計六人のプロフィールと睨み合いがはじった。海月荘は台風の中に在る。北上してきた台風は兵庫県全域をその手中に入れ力の限り暴れている。明石海峡大橋は朝から晩まで通行止めとなり船も出る事は出来なくなつてゐる。各地への物資は四国側からに頼るしかなかつた。窓には風が何度も叩きつけられ雨が壁に突き刺さらんばかりに振り続けていた。テレビではこの台風の進行スピードが異常なまでに遅いと報告されている。この一日、まるでこの淡路島に根を張るように台風は動かない。

テレビではこの異常気象についてずっと実況されていた。竜巻とも嵐ともつかぬ海の荒れ模様は全ての国民の目を釘付けにしている。「用意が出来ましたよ」

彩が階段の下から声を上げる。一人が降りると居間にはテレビが付けられ四人分の食事が並べられていた。テレビでは気象情報が右下に陣取つてゐる。食事といつても豪華さはない。人数分のおにぎりと味噌汁があるだけだった。

「ささつと作れるものっておにぎりくらいしかなくつて……後、朝作った味噌汁ですか？」

申し訳なさそうな彼女にありがとうと礼を言つて座る一人。奥のキッチൻから日高が戻つてくると手には梅干と焼き海苔を持つていだ。

「まだ病み上がりだらう。あんまり食つとかえつて身体に悪いんだ。これぐらいが丁度ええ」

悠はおにぎりを手づかみすると一口。噛めば米の甘味が口に広がる。程よい塩の味。味噌汁も塩辛くない胃にやさしい薄味だった。

「これからどうするの」

「食べ終わつたらすぐに行く。眠つていた二日の中にあれが現臨しなくて済んだのは幸いだけどおそらくもう時間はないよ。被害者が出でないってのが理由だ」

「行くつて外は台風だぞ。やめとけ、また海に落ちることになるで」

日高が言つたが悠は義足の部分を見て首を振つた。彼はこの一日、期を狙つて沈んだ義足の回収を試みていた。しかしこの台風と事件の発生から船を出す事ができなかつた。まだ悠の装着していた義足は沈んだままである。

「笙子さんは結界をお願い。あいつでかいよ」

戦闘準備は完璧だつた。目標の居場所も掴めている。ここで時間を掛ければ間違いなく大変な事になる。四人のいる居間からは目標が見えている。雨は止まないだろう。だが悠の決心は揺らぐ事はない。

「この義足なら大丈夫。でしょ？」

「ええ。海の上でも地上以上の力で戦えるはずよ」

そう言つ笙子も同じようにおにぎりを口に入れる。彼女は焼き海苔で巻いていた。ぱりっと割れる音がする。

「こんな雨の中で弾けるんですか？」

「雨や風なんて関係ないよ。元より音とは違うんだ」

「奏者の鳴らす音つていうのはね、私たち魔術師にしてみれば魔力の結晶に近いのよ。耳に聴こえる音とは違うの」

雨や風は差し支えない。奏者の力がその程度の騒音でどうにかなるものではない。彼らの力は何かで遮られるものではないのだ。音の前にあらゆる自然の遮りは効果を無くしそこに現れるのは色と音。演奏が始まれば奏者の力は何人たりとも犯せぬものとなる。

お茶を飲んで口の中を清める。急ぎすぎる心が抑えられたように思えた。

食べ終わる手前で笙子がテレビのチャンネルを変える。左上に表示されている時刻は五時を過ぎていた。

「人払いは三十分以内に完成させるわ

「わかった」

まだ味噌汁を飲んでいる笙子だがその言葉に偽りはない。悠は一度、部屋へ戻りギターを手にする。窓から見える橋にはここへ来た時とは全く違う負の感情が渦巻いて見えた。一階に降りて二ユース

を見る。笙子は何度かチャンネルをえていたがどれもすぐ近くの橋を映している。録画したものばかりだった。現在、ヘリが飛ぶには風が強すぎる。地上からの撮影も危険だと誰一人近づける者はいなかつた。

その映像に必ず映る飛び降りた場所。その下には青い海があつて黒く渦を巻いている。

「それじゃ行つてくるよ

「ちゃんと帰つてきなさいよ」

笙子は動かない。立ち上がった悠を見てただそれだけ言葉にした。このやりとりももう何度目だろうかと思い出を振り返る。悠は息を飲んで一人、山を降りていく。

## 第一章八話

船乗り場には一台も車がない。雨と風の中、悠は傘も差さずに一人歩いて目的の場所まで進む。台風は強烈な嵐を作り上げていた。それでも少年の足は鉄のように重くがつちりと大地に踏みしめる。一人きり歩く悠の周囲には一人も人間はいない。出港を見送り船は波止場に停まっている。休憩所にさえ人の姿はない。まるで見棄てられた廃屋のように淒惨とした風景が広がるばかりである。同様に周囲の建物からも人の気配が感じ取れない。悠はこの海を目の前にして唯一の存在となつた。

海月荘から出て三十分は経つている。誰もいないのは笙子が結界をはつたからに過ぎない。彼女は橋を含める周囲約二キロに渡り完全なる空間の拒絶を行なつてはいる。タイムリミットは一時間もない。だがその間はいかなる人物もこの場所を意識する事も出来ず記憶する事も出来ない。人を払うは魔術師の役目である。いかなる超常なる能力を持つても奏者にこの様な事は出来ない。また人間の力においても同じである。強大な権力も魔術の前には意味がない。魔術師としての本領が発揮できる場面だ。

奏者は彼女の手助けなくしてこのような地で戦う事は出来ない。対岸の住宅街は人で溢れかえっている。その目を欺く役目を彼女が果たす。

無人の港は荒れる波と暴風で景色を壊している。フェリー乗り場から進むと漁師達の使うボートが並んでいる。そこへたどり着くと海の底で標的が目を醒ました。浜に着くとその広大さと激動に感動さえ吹き飛ぶ。対岸まで広がる青は黒のように濁り逆巻いていた。砂浜はすでに侵食されていて降りることが出来ない。防波堤の先は崖のようになつていて一步踏み出せばあつという間にあの世行きだらうつ。

愛用のギターに手をかける。

深呼吸してゆっくりと弦に触れる。指先に全神経を集中させる。体を通して音が息を吸うように鼓動する。ギターから鳴る音は波を作り出す。確かな衝撃と共に降り注ぐ雨粒を弾いて服を濡らしていった雨さえも消し飛ばす。

眼差しは彼女たち六人を捉えた。

海の上、逆巻く波の上で浮遊する六つの影。悠がやつてきた事に反応して浮かび上がったもの。そのうち一つが中心に浮き、まるで星の如く位置を取り悠を見つめていた。

テンポを上げる。次第に音は一つのメロディーラインにそつて曲を奏でていく。雨や風の作り出すものとは違った音の波が海の波を宥める。ギター以外に何もない。だが曲は大きく響き渡る。そして彼女ら六人のもとへ届くなり急激に激しさを増していった。

荒れる海の中、女の思念が浮かび上がっている。海の底にあつた思念は自由に上昇していた。六つの影が天に昇るように飛翔する。悠には被害者たちと最初の一人、高岡美咲の顔が見えていた。あの痩せ細った顔ではない。自身らの本来の姿だ。だが白く灰が舞つたようにならぬ姿はただ浮かぶばかりでこちらに来る気配はなかつた。

まるでオルゴールの回転盤。星の五人はくるりくるりと踊る。誘つているのだ、少年を。

弦に力を込める。音は衝撃となり海面を切り裂いた。衝撃は女に向かつて走る。

「また来てくれたのね、あなたも一緒にになりたいんじゃないの？」

女との距離は五百メートル以上、加えてこの暴風。互いに音も声も聽こえるはずはない。しかし悠の音は彼女たちに届き、彼女の声は意識への介入へと至る。あの海の中と変わらない。彼女の声は例え深海百メートルであろうとも変わらず聽こえるだろう。そう例え橋の上であつても変わらないのだ。

音に魂を込める。音に色が点る。やさしい青色。悠は確固たる意思のもとギターを弾く。彼女の声が届かぬ場所に心はある。他人の

声に負けはしない。自ら命を絶つなんて想像さえ出来ない、と念じる。

「まずは一人目だ！」

瞬時に標的を絞る。まずは周りの五人。その五人はまだ踊るようしているだけだがそれこそが彼女の力を強めていた。一人目は最初に落ちた人間。力はそれほど強くない。思念の強さはその人物の思いの強さに比例する。もちろん生きている人物でも同じで思いの強さがそのまま強さに変わる。

奏者にとって肉体の強さは関係ない。そして奏者の繰り出す音も思念の一部に変わりは無い。一人目の思念はすでに消えかかっている。おそらくは魂は半分ほど喰われている。

音が走る。海面を走る衝撃で一瞬にして消滅したのだ。あっさりとしたものだつた。この世との最後がたつたこれだけで終わつてしまふ。続いて二人目も同じようにして消えた。これが今生最後のお別れというのは切ない。

「なにをするの？ お友達になりたいんじゃないの？」

叫ぶ女。だが悠は手を止めない。

「せつからできた友達なのよ、やめて」

鳴り止まぬ音について中心の女が飛び込んでくる。その速さはまさに神風。彼女に触れるのは良くないとすかさず飛び退く。義足の能力は人間を圧倒していた。三メートルは飛んでいる。

「なにが友達だふざけるな！」

本望じゃなかつたもしけない。不幸な事故だつたかもしけない。だからつて他人を巻き込んでいいはずがない。

強く弦を弾く。魂の高鳴りが響き、女以外を吹き飛ばす。さすがに消し去ることは出来なかつた。だが動きを止めることがくらいはできたようだ。動きを制限され身動きの取れなくなる周りの三人。そこへ一撃、衝撃を飛ばす。丸い筒のような衝撃が飛んでいく。見事飛散させる。

「これで三人目」

「やめてって言つてるでしょうが！」

彼女の叫びを無視して再び高く飛び上がる。刹那、正面には残りの靈が一体。視界に入る。邪魔はない。ならばギターを鳴らし同時に消し去つた。彼女を取り巻いていた存在は全て消え去つた。周囲を浮いていた彼らは誰もが確かな意識をもつていなかつた。考えることの出来る靈はただ一体。髪の長い女、高岡美咲の靈以外に他ならない。

さすがに空中で動くことは出来なず彼女の腕が触れる。痛みともに押し迫つたのは意識だつた。彼女の思考が逆流してくる。彼女の死ぬ直前。なぜ死んだのかその感情が雪崩の如く悠の頭にかぶさつしていく。

「あんたのこと、可哀想だと思つ。けど、だからってやつちやいけないんだ！　こんなこと」

全てを払いのける。女の力が弱まつたような気がしてゐた。まるで払いのけなくとも彼女は自分から手を離したような感じ。彼女の意思が消え去る。同時に彼女も悠の身体から離れていく。そして落ちる。足場はない。下降にはその身を飲み込もうとする海があるだけだつた。渦を巻き落ちてくるのを待つてゐる。

義足が震える。何も意識していない。膝から下が勝手に体勢を整えると装着する前の黒い姿へと戻つた。

「そんな嘘でしょ？　なんで立てるの？」

「これつて！」

悠自身も驚愕した。しかしそんな考えは瞬間でしかない。確かに悠の足は、身体は海面に浮いていて義足は逆巻く波さえ寄せつけることもない。蒼い光を放つて立つてゐる。

「この義足本当にいい物だ、ありがと」「ここにいない笙子への礼をする。

「君のその脚……邪魔よ」

女が追いかける。しかし悠の見た方向は違つた。彼女へ向ける音はない。迫つてくるもう一つへ心を向ける。

## 白い闇。

船でやつてきた日、最後の被害者を包んだあの白い闇。白色の巨  
大な闇が包み込むように迫り来る。義足は悠の意識とは別にあるよ  
うに勝手に飛び跳ねる。しかしその動きが少年の行動を予測したよ  
うに可動するのだ。あまりにも無茶苦茶な軌道に白い闇は動きを追  
えずに入った。

闇の中、白い姿を確かに見た。

赤い眼をしている。大きさは七メートル……いや、それ以上。海  
面に浮き出た身体だけじゃその底は測れない。

「ようやく出てきたな」

女の靈は一人では何も出来なかつた。彼女の心がどうであれそれを実行させることが出来る者がいる。古くから人の心を操り世界に歪みをもたらす者がいる。それを妖魔と言い彼ら奏者によつて静められてきた存在。

眼前の敵を見る。視界はこの大きな怪物を捕らえ闇を消す。

「蛇か」

白い体躯をくねらせて海面に現れている。とても大きな瞳は赤く光る。両者の瞳が交差する。互いに敵と認識した瞬間であった。

再び海面に降りて距離を取る。ギターの力を最大限に引き上げる。少年の相棒は全身で搔き鳴らす。今度は全身の力を一点に集中させた。大きな力を纏めるには時間がかかる。一対一だと不利かと見上げれば彼女は空で停まっていた。

果然とその場で停止している女に大蛇は口を広げて進む。

昔から世界には闇がある。その闇は時に人の世に姿を現し全てを飲み込む。

肉も、骨も、記憶も、魂も、その存在さえも。

妖魔は生物の魂を喰い生きるとされる。彼らの誕生から死に到るまで全て他者の命で生成されているのだ。

飛び込み命を失った者達の魂が希薄だつたのはすでに蛇が食つた後だつたから。悠が消し去つたのは最後の欠片。力をつけた妖魔は

身体を得てこちら側へと現れる。

それを現臨という。

「この世に現臨した蛇は今まさに役目を終えた女の魂を喰らうと思ふ  
そうとしていた。」

「やらせない！」

弦に心を込める。狙うのは蛇だ。一気に力を解放する。音は衝撃。波から赤い光と姿を変えて蛇に伸びる。一筋の光が捉えたのは肉体。光の動きはギターで奏でる曲で調節される。光は音が鳴りつづける限り消えることはない。光は消えない。大蛇の身体を光のロープで海へ叩きつける。そこに腕力は必要ない。必要なのは音。それも強い意思の籠った音だ。身体の大きさは比にならない。

大蛇は海面へ叩きつけられるとそのまま海へと潜った。光はまだ蛇の身体を縛っている。そのまま釣り上げる。波が強く大きく揺れる。圧倒的なまでの強さだった。だが義足が耐えられず痛みを訴える。悠が足元を見ると脚が浸水していた。

海底からの咆哮。一撃だつた。身体は真下からの暴力的な水に押し上げられる。義足は力の限り主の体を守る。

蛇の咆哮は巨大な水の塔を形成しそのてっぇんに押し上げられた。飛び降りる事は出来ない。すでに悠の身体は空にあった。それでも心は強くある。どこにいる、と大蛇を探す。

遅かった。思考が行動へ移る前に大蛇はその体躯を移動させてきた。

身体は塔のてっぇんからさらに上空へと追いやられる。まるで玩具のように浮遊するしかなかつた。驚くほどゆっくりとした時間の流れだ。雲にさえ手が届くほどに思えた。さらには遙か先にいる地上にいる笙子の姿まで瞳に映つた。

浮遊から落下へと変わる。口を開いて待つてゐる大蛇へ落ちる様は傍から見て酷いものだと感心する。

「イメージは……虹。七色の光の虹だ」

コントロールノブを精一杯に引っ張り一点集中型に変更する。

窮地に困わらず悠は冷静だった。

「光のシャワーだ。受け取れ」

最初は赤。次は青、緑と次々に虹色の光が溢れる。天から降り注ぐ光は次々に蛇を掴まえていく。口を開じさせてその上に悠が乗る。生身の魂と触れる。妖魔に身体はない。肉体は魂が実体化したもの。触ればその熱さに身を焦がす魂の現象。まるでマグマのように燃える命。だが義足は物ともせずに立っていた。

「ここまでくると凄いっていうより卑怯だな。でも、お前にはこれくらいがいいのかもな」

最後の一本。ギターネックより生まれる光は無色透明。雲の上で輝く月が一瞬だけ悠に呼応したように輝く。暗闇を一筋の光が照らした。まるで琥珀色の槍。

黄金色に染まった光が蛇を一刀両断にした。

蛇には叫び声さえ出ない。あげさせない。

引き裂いたその最後、蛇の腹に溜まっていた人間の魂が解放されていく。さつき消した人たちのものだった。その残りが溢れ出す。彼女、高岡美咲の魂さえもそこにあった。

まだ海は荒れていたが悠の心は穏やかで波紋一つない水面そのものだった。

塔が崩れ悠の身体は海へと落ちていく。落下する中で見た命の光は異常なまでに美しい。海面に降りるが痛みはない。すべて義足が吸い取った。

消える命のなかに彼女の意識が垣間見えた。

「これで本当に最後だ。でもこんどは一人じゃないよ。さようなら上昇する先には彼女を待つように五体の靈がいる。地上、淡路島からは六人が見失わないように緑色の川が流れている。

少しばかり先に逝つてしまつたが最後に残つた心は彼女と一緒に行こうとしている。消える瞬間、彼女が涙を流したように見えた。でも幻影だ。

彼女の姿はいつの間にか消えていたんだ。

してやるのはここまでだ。  
すべての光がなくなる。

雨曝しのなか僕はその後もずっと一人でギターを弾いていた。

かの少年が戦闘を始めてから五分ほど経つ。雨が降りつづける中、一台の車に乗った笙子と彩が少年を見ている。人を避けさせる魔術はすでに発動している。少年の戦いを見られる者は一人以外にいない。対岸の街も少年と嵐の中で揺れる影を認識できない。それは壁を作るわけでもない。人間の意識そのものを背けさせるのだ。術の発動している間、そこに何があるのかなど誰も気にしてない。場所が大きすぎるため結界の耐久時間は少ない。持つて二十分が限界だろう。しかしその間に悠は戦闘を終わらせると笙子は読んでいた。

戦局はどうだらうか、と悠に目を向ける笙子。

周囲の雑魚を一匹ずつ消している。あれでは時間が掛かるかもしない。なにより奴の姿が隠れたままだ。死者を弔うことなど後回しで良いといふのに。ほんの少しの苛立ちの中、飛び回る悠の姿には圧倒される面も現れる。今回の義足、間違いなく最高級の一品だ。まさか海の上を走れるとは思いもしなかつた。

「笙子さん」

隣りで双眼鏡を通してみている彩。連盟から与えられている靈視を可能とする眼鏡である。魔術師と知合いだからと言つて誰もが靈能力を持つているはずはない。連盟で働く人間の大部分は普通の人である。彼女らが少年と戦う影を見るにはこういった装備に頼る事になる。

「あの飛んでいる彼女、例の高岡美咲さんで正解ですね。写真とそつくりですよ」

高岡美咲。悠を引つ張り上げる際に見た女だつた。

今回の事件、一番最初の原因はなんだつたのか。その問い合わせに彼女がいた。この数週間で起きた自殺が引き金になるには少し時間が早い。妖魔に操られた人物がいるならもつと確かな意思を持つた魂が必要になるはず。なのに最初の犠牲者は極めて普通の考えをも

つていた人物でとても自殺するような人物ではなかつたと知人、友人からの証言も取れている。この世に絶望も失望もしていなかつた。また生活は順風満帆とはいかない物の不幸せではない。そこに妖魔自ら心に入れるのは不自然だ。生きている人間の意識を意図的に操る事はいかに奴等といえど難しい。特にあのような中級の妖魔であれば尚のこと。

完全に心が無防備になつた者こそが妥当だ。

それが彼女、高岡美咲。

「哀しい人生ですね。特に最後は……私でも死にたくなりますよ」双眼鏡越しに観る彼女がつぶやいた。私たちが得た情報は彼女の末路だつた。高岡美咲の出身はこの兵庫県淡路市、つまり淡路島の北部となつていて彼女の実家はこの近くに存在している。イザナギの情報はとても早く正確に彼女が死ぬまでの経歴まで綺麗に調べあげていた。

彼女の家は私達の行く先にあつた。

人避けの魔術はその効力が切れるまで仕事を果たす。笙子は車のエンジンを再び点けると無人の道路を走る。

高岡美咲は高校時代まで何不自由なく暮らし、こちら側とは違う普通のまともな人生を送つていた。自殺の原因は神戸の大学に進学した頃。その頃に出会つた友人。それが全ての元凶とも言つべき存在となつた。

「友人に恵まれなかつたのね」

その友人と出会つた直後、彼女の運命は激変する。大学二年の夏、彼女は大学を退学処分される。理由は学費の滞納と本人の出席率の低さだ。春頃からはどの講義にも出席していない。その背景には麻薬が隠れていた。昨今、日本でも麻薬は簡単に手に入れることができ。単にそのルートが存在する側にいるかどうかが問題だ。

彼女の場合、友人が線引きとなつた。手に入れた麻薬を使用した彼女は日に日に狂つていった。ほんの少しの快樂は彼女の神経を破壊するまで時間は掛からなかつた。

最初は遊び感覚だつたんだろう。すぐに止められると思ったのだろう。その軽い気持ちが身を滅ぼした。彼女に残つた多重債務の額は二百万。親はその金額に驚いたらしい。一人娘が大学に入学した頃の嬉しさなど消え嘆きだけが溢れた。

レポートには記載されている。どうやら薬を購入するのに親からの学費をつぎ込んでいたらしい。中退してからの後も酷い。繰り返す薬物で身体は徐々に内から破壊されていく。精神も病んで入院していたと記載されている。身体が崩れていく前に精神が駄目になつたんだろうな。この頃には親は彼女を見離していた。それでも可愛い一人娘だ、何とかしたいと神戸にあつた精神病院をあてがつていたのだろう。結局それが彼女の最後を決めてしまった。

「彼女の最後は自殺なんですね？」

「違うわ」

彼女の最後は自殺と記されている。でもそれは違つてている。もし自殺と言つ選択を選ぶなら離れたこの場所へやつて来ることはない。「彼女のデータに書かれているでしょう。病院から抜け出した彼女は車を奪つて走つていた。そのとき目的の場所があつたのよ、おそらくその場所は彼女の実家」

高岡美咲が車を強奪したことは表には出回つていらない。精神病患者が病院から抜け出し死亡したなどと世間に知られればどれだけの被害が出るか解らない。病院は隠していた。連盟はその情報をも短時間で聞き出した。

「なぜですか？」

「人間、弱り果てた最後に目指すのは大抵、自分が生まれた場所よ。もしくは育つた場所。彼女もそうやって実家を目指した。自殺として断定されたのは彼女の精神状態やブレーキのかけた際の跡がなかったことからでしょうね」

その頃の彼女に自我はほとんどなかつたはず。実家に帰つたからつてどうなるものでもない。ただそこにあるのは精神の崩壊があつて真つ白な空白となる……それだけだ。どうしようもなくなつた時、

人間が向かう先は家だろう。大半の人間は家に暖かみを持ち無償の愛を受けとつてゐる。そこは自分の敵がない最後の砦。

笙子の瞳に映つていたのは無人の道路ではなく荒れ果てた木造の家だつた。車の先にそんな物はない。ただの幻想であり彼女の想像でしかない。

「橋から転落したのは偶然でもなんでもない。無理やり運転していたのよ。免許もない彼女が最後の思考で……最悪の状況下で彼女は運転をしていた。そしてあたり前のように海へと落ちたのよ」

巨大な橋の柵はとんでもなく軽いもの。時速百キロ以上で突撃すればひとたまりもない。彼女を乗せた車はそのまま海へと落ちる。レポートには遺体は車と一緒に引き上げられたと書いてある。おそらく最後に残した一人で死にたくないという思念だけがあの場所に留まつたわけだ。そしてその思念はやがてあの妖魔に利用され今回の群発自殺を招いた。

「あの五人は何気なく走つていただけ。彼女の声を聞いて突然、死んだつて言うことですか？」

「そうでしょうね。高岡美咲はもつと漠然とこの橋を走る人たちに向けられていたでしきうね。被害が五人で少ないほうよ」

そう語る笙子の瞳にも妖魔が映つた。悠は天高く飛んでいる。なにも心配することはない。あの子の瞳は揺らぐことのない信念と意思を持つていてどうわつく心を落ち着かせる。悠を預かるとき男が言つていた。自分を超えることの出来る奏者だと。その素質を持っている大切な子だと。笙子は彼からあの子を任せているのだ、死なせてはならない。だが無様に死を迎える程度なら助けはしないだろう。

それは私自身もそうだ。

「悠君、大丈夫なんですか？ 助けなくていいんですか？」

丸い後が付きそうなほどに双眼鏡をくつつけて見ている彩が言った。笙子はとうとすでに瞳にその光景を映しておらず道路へと向かれている。

私はあの子を見てきた。あの程度じゃ死がない。それどころかもう勝っている。光の矛先はすでに蛇を捉えていたと肌で感じていた。

「信じているんですね」

「ええ、だつて私の息子よ」

自信を持つて発言する。血の繋がりはなくとも、何所の誰から産まれたか知らないけれど、あの子は自分の息子だ。

見れば光は蛇を穿つ姿が見えた。琥珀色の光はこれまで見てきた奏者全てを超える輝きであった。関西という枠に收まらず全世界でも稀に見る光。

本当に律さえ超えてしまいそうなほど輝いている。でも律は悔しいなんて思わないだろうけど、それはとてもおかしくてうれしい出来事なのだ。

車が停まる。高岡の表札が掲げられた家が在る。だが人は住んでいない。無人の屋敷はすでに寂れ雨に晒されていた。高岡美咲が死亡した日からすでに五年が経っていたのだ。車から降りると傘を差す間もなく冷たい雨が全身を濡らした。

振り返れば丁度、悠がいる場所が見えた。事故の現場からもこの場所は見える。空高くに浮遊する彼女はじつとこっちを見つめていた。その瞳の先には私ではなく彼女の家があるだけ。

「ここでなにをするんですか？」

「供養……かな」

笙子が懷より杖を取り出す。といつても宝石や装飾はない真直ぐで細い棒のような物だった。杖を指揮者のタクトのように振るう。すると寂れた家は光を放ち天へと昇っていく。その最中、消え行く彼女の魂を包み込まれていった。

大阪、いつものように電車に揺られて辿り付く帰路。人気のない道を選んで進む悠。淡路島の一件は笙子が後を引継ぎ先に帰つてきたのだ。とはいえ引継ぎといつても事件の犯人たる人物は死亡しており妖魔も悠の音楽によつて消滅している。あとは事後処理があるだけだった。そうなれば悠がいてもする事はない。笙子は「遊んでいけば」と声をかけたが無駄だった。嵐が去り船が出港できるようになった途端に乗つた。

そして今、自分の部屋となつている質素な空間へと戻つてきた。あの潮騒の香りは当然ない。

生活感のないフローリングの部屋。冷蔵庫の中に入つているビンを取り出す。部屋の隅にまで進むと壁に背を預けてギターをケースから取り出す。あの台風の中でもギターは一切の損傷も錆びもせず身体を保つてゐる。誰もいない無音の空間だった部屋に静かな音が鳴る。

弦は彼ら奏者の力を響かせるパート。すぐにギターの手入れに入ろうと予備のパーツを広げた。全ての弦を取り部分ごとに分割する。ボディ部分を丁寧に磨く。このギターの本来の持ち主は現在行方不明で調査中。旅に出た本人が最後に悠へ預けたものである。

黒いボディに光の角度で色が鈍くも明るくなる特殊な偏光色加工。ボディの右下には赤い色の破線がながれている。破線はネットへと一本の線を残してゐる。まるで生き物のようなこのギターは悠の相棒となつてゐる。

ゆっくりと丹念にボディを磨き上げしていく。分解したパートを組み立てていく。最後に弦を張つていくと再びその姿を取り戻す。もらつたこのギターの手入ればこれで終る。なにも特殊なことをするのではなくギターを吹き上げるだけといったほうがいい。もし半壊するような事があれば術者は奏者ではなく専門としている人物の

力が必要となる。

ピンと張った弦を弾くと部屋に心地よい音が響く。力を放つと弦は痛みすぐに新しいものと交換する必要がある。

「やっぱり悠の作る音は素敵だね」

擦れた声がする。かすかに女性の物だとわかる程度のもの。振り向けば窓辺に夜風と一緒に彼女がそこにいた。

「ちゃんとドアから入ってこいよ」

悠はそんな彼女に目もくれずドアを指さす。

美しい銀色の髪にこれまで整った顔。背は百八十センチはあるうかという長身の女。悠と並ぶとまるで子供と大人。彼女こそ篠塚笙子の事務所立ち上げに奮闘する最後の一人である。名を時雨という。「面倒なんだもの」「ここには三階だよ」「関係ないわ」

まるでどうということはない。地上三階であるうとも彼女は軽く飛びやつてくる。だがこれは彼等一人の日常であった。時雨はドアから出入りせず開け放しの窓からやつてくる。半年前の一件以来、彼女は悠にべつたりとなっていた。

「検査、どうだった?」

「退屈だったわ。何時もと同じように薬と身体の検査ばかり、それより悠はどうだった?」「どうつて?」「どうつて?」

「淡路島に行つたんでしょう。お土産とかないの」

手を差し出す。白い掌が下を向く悠の目に映つた。何かよこせと言いたげなその動きにも悠は動じない。するとそのまま身体を摺り寄せる。

「ないよ」

時雨は身体をぴつたりと合わせると視線は足へと動いた。眉間に皺を寄せるようにして覗く。

「足……変わった?」

悠が頷くと手をあてがつた。一心同体と化した義足から時雨の温もりが伝わる。荷ね おん よりも僅かに熱い体温だった。

「向ひひでさ、前の奴落としちやつたんだ。でもいいでしょ、こ

れ

「波長が合つみたいね」

摩るよつて義足の部分をさわる。義足を通して時雨の力が流れ込む。

「どうしたんだよ」

いつもとは違う彼女の仕草に戸惑つ。彼女の身体が密着する。背中に暖かみを感じる。

無機質でしんと静まり返つた部屋に人の触れ合いで火が灯る。

「寂しかったんだ。音、聴かせて」

時雨の身体は継ぎ接ぎでできている。服の下からその継ぎ目がほんの少し透けて見える。胸は平べつたく背中には彼女の純粹な温もりだけが伝わっていた。

僕はそのぬくもりの中ギターを鳴らすことにした。

神戸の山間。まるで永遠に凸凹の続くような土地。あまりにも不釣合いな一本の線が天へ向かつて立つていた。地上から少し首を上げればその塔を見ることはできた。たった一棟、山の天辺からそびえ立つ。

近代、特にこの2000年以降、都市部ではその街のシンボルとして背を高くした建造物が増えた。増加する人間を収容するための施設とはいえ数は多く自然を破壊して作られた。その時代の流れかすでに人の住む場所さえも空へ向かつて高くある。人々はその巨大な建造物に恐れを抱ぐどころか自らの業の素晴らしいことを誇るようになっていた。

関西、兵庫県は土地の安定が非常に厳しく瀬戸内海に近い都市部は山に囲まれるようになっている。海岸の華やかさに比べ山は多く巨大である。主要都市から離れればすぐに山が出現し行く手を阻もうとされる。ここが日本であるため仕方のない事だが不便この上ない。住民はその山を削り取り作られた住宅街に住むほどだ。

そのような立地に関わらずこの真白き塔はそびえ立つている。根をはつたのは他に較べると平地のように削られた山。その肌の殆どは高速道路のため削られていた。地上五十五階建ての建造物にはあまりにも不都合だった。だがこの場所に建てた人物はここでいいと言ひ張つた。

まるで塔の如き出で立ちである。日本全国を捜してもここ以上に高い場所は滅多にないだろう。数キロ離れた都市からでも周囲の山よりも高いその塔は確認できる。

塔の名前は『神戸言霊学園』という。そして塔の中身はマンションである。

建てたのは日本人ではない。少し昔、この土地を買収したドイツの会社がある。その社長であるセルマ・フォースターという大金持

ちがいた。自分たちが日本へ移住する際に必要だと主張し、たつた一年程度で建ててしまったのだ。

建造主であるセルマ・フォースターは自分達の意志だけで工事を進めた。マンションとして建造されたのにも関わらず日本人……いや他人のために用意した部屋はなかつた。入居者は全て、彼女の知人とされ部屋を借りる事も購入する事もできない状況であつた。所有者の意向なら仕方がないこと。それぐらいは理解できるが他にも地域住民からの苦情や風景を壊されたなど反発もあつた。

その全てを受け取つたのは関西魔術連盟であつた。このマンションは彼らにとつても必要なものであつたのだ。事態を收拾するには時間が掛かつたが程なくして騒ぎは消えた。今ではまるでシンボルの一つとしてその姿を見せている。

マンションには当然、住民達がいる。セルマ・フォースターが言う知人達だ。だが以前より日本に住んでいた者はごく僅かである。完成後、どつと移住してきたのだ。親のいない子供たちが、彼女と一緒に何十人も一斉に。

一階あたり二十室から三十室とあり、そのどれもが3LDK以上という空間を保有している。子供達が住むにはあまりにも贅沢なものだ。防犯システムも最先端の物を導入しており目の肥えた高額所得者さえ満足する内容である。もちろんこのような建造物がメディアによつて報じられないなどと言う事はない。建造開始頃からずつとマスメディアの目に晒されていた。

当然のようにテレビ、新聞、ネットといった媒体を通し情報が流れた。それを見てここへ入居を願つた者たちが殺到していくとも報じられていた。だが建てたセルマはそれを鼻で笑うように拒否した。最上階の一室。窓から覗けば遠くに瀬戸内海が見える。元より都市が位置する場所よりも高い場所に立つてゐるのだから当然だ。夜になれば海岸を輝かせるイルミネーションが見える部屋。見下ろせば遙か下、意識が搖らぐほどの高さを思い知らされる。それがこの場所がまるで別世界にいるようと思わせる。平行に景色を觀ると

## 面の青。

まるでここは雲の上のように。

しかしながらこの素晴らしい景観に一切の興味を示さないのがこのマンションの住民たちだ。彼らには景色など見えていない。窓から見えるその全てがどうでもよく写る。それはこの部屋でカタカタとキーボードを押しつづける男にも同じだった。もつ彼此半年近くになる。一日の殆どをパソコンの前で過ごしていた。部屋を出ることはなく食事はインターネットによる通信販売で届くものがデリバリーバカリ。運動などまったくしない。一日に歩く歩数は百歩以内、不健康極まりないこの生活を送ってきた。それでも身体能力にそれほど衰えはなく脂肪もついていない。元々、痩せ細っていたため少し肉がついて程よい感じになつただけである。

部屋の中はシンプルといえば聞こえはいいが言い替えれば殺風景である。パソコンの十五インチモニターによる光以外はなく広い部屋の端にベッドがあるだけで生活観はまるでない。フローリングの床は痛みも埃もなく出来たばかりの頃と何一つ変わらない。部屋を遮るドアの隙間からも光が漏れてくることはない。どれだけ広い空間を持つても彼はこの部屋で一人きりなのだ。

この半年、部屋を訪ねてくるのは限られている。その一人がやつてきた。

「お父様、お呼びでしょうか？」

それは突如のこと。美女が現われる。部屋のドアは閉まつたままだ。美女は腕はおろか指さえ動かしていない。もちろん彼はパソコンの前から動いていないためドアに近づいていない。だが驚く事はなかつた。突如として現われた美女に一切の挙動なしに話をはじめた。

「ええ、時間はぴつたりですね。良い事ですよ、氷室」

彼の見ている物はモニターの右下に映つていたデジタル時計だつた。

氷室と呼ばれた美女はにっこりと微笑む。彼女の声は凜としていた。

て清々しい。自信に満ち溢れている。キーボードを押すことをやめるとモニターへ向けていた身体を彼女のほうへ向ける。彼は壁に手を伸ばし電気をつけた。部屋にぼんやりと琥珀色の光が点る。

氷室の姿は実に痴美で誘惑的である。肩より少し長い赤い髪はふんわりとしたウェーブがかかつている。名前とは違ひ青い瞳があつた。彼女は薄い青の制服を着ている。制服はシャツワンピースタイプでネクタイはない。このマンションに住む住民の九割がこの制服に袖を通している。だぼつたさはなく彼女のくびれも豊満な胸も良く見える。日本人離れした彼女は名前こそ日本人のものだが姿は別の国であった。

「当然ですね。遅れるはずありませんもの」

胸の辺りに手を当てて話す。おっとりとしながらも気品溢れる口元と仕草から彼女の育ちの良さが見える。

対してパソコンを弄っていた彼は同じように動くがどこか歪である。ゆっくりと動いているというよりは動かすのに時間が掛かると言つべきか。言つならば人間らしくない。そんな彼は白衣を着ている。部屋と同じ色の白い染みのない一品だ。そればかりか所持しているシャツ全てが城で統一されていた。上半身は彼の白髪と合わせりほほ白であった。その髪から覗く瞳の黒はまるで闇の中に誘うよう動く。

その闇を和らげるのは眼鏡。黒のフレームで作られていた。中心の瞳との壁を作っているガラスが膜の代りをしているように黒を濁す。

「氷室にお遣いを頼みたくてね。行ってくれるかい」

立ち上がり美女の頬へ細い手を重ねた。やはり彼の行動は少し遅れたように動く。ひんやりとした手と薄い皮の触感が美女の心に触れる。氷室はその手に自分の手を重ねた。

「もちろんござります。氷室はお父様の言つことなら全て聞きますわ」

彼女にとつて当然の返事であった。これまでと一緒に、ずっとそ

してきたようにこれからもそうであるように彼女は口元である。

「しかしながら」

氷室が口にした。自分から発言する事は滅多にならないといふのに彼女は口を開いた。

「なんでしょう？」

胸の前にあつた手を下ろす。

「このよだな時期に私が動くとこには……やはりお姉さまの件なのでございましょう？」

「察しが良いですね」

男は口角を上げて微笑む。それとは逆に氷室は俯く。

「ですが私はお姉さまの対であり敵に成りえませんのになぜ私のですか」

彼女にはお遣いの意味するものが解っていた。この後、自分に課せられる使命も。だが自分の力がどの程度かということも知っている。だから理解できないでいるのだ。困惑は思考を鈍らせる。男は告げた。

「それなら大丈夫ですよ。あの子はもう、すでに私の娘でも氷室の姉でもないのですよ。私はその彼女の元から、かの少年を連れて来て欲しいのです」

「それは……それは少し哀しいですわね」

触れた手に頬擦りしながら氷室がつぶやく。ここにいない姉を想う。瞼を閉じて男の肌に全てを預けるようにする。しかしその口元は緩んでいてまるで善かつたと口に出すものとは逆を示しているようでもあった。男はそのことを解つていた。解つていて髪を撫でる。

「それでは行つてきますわね、お父様」

頬を離しそうと口づけを交わす。美女の熱い吐息が微かに男に触れる。雄を誘う雌の匂いがした。唇は芳醇な果実のように絞れば赤く弾けるだらう。今すぐにでも奪いたくなるその一息に男は微動だにしなかった。唇が離れた瞬間、氷室の姿が消えてしまう。残つたのはあの男を魅了する肉体から伝わってくる甘美な香りだけであ

つた。

「頼みましたよ、氷室」

一人残った部屋で呟いてみる。静けさの戻った部屋ではパソコンの静かな音がするだけで他には何もない。再び机に戻ろうとする入れ替わるようにドアを叩く音がする。男はその音に向かう事はなかつた。一度、二度とドアが叩かれようやく鍵が開く音へと変わる。「ちょっと聴こえてんでしょう！ 出なさいよ、夾」

さつきまでの雰囲気を全て消し去るやかましい声だつた。

「セルマ、静かにしなさい」

金髪のロングヘアーがよく揺れる。ついでに着ている白と金のドレスもよく揺れていた。夾と呼びセルマと呼ばれた彼女は男から見てまだ幼くあつた。さつきまでいた氷室に比べると少し年上だろうか。そんな彼女はひらひらのドレスを着てよく跳ねる。彼女こそこのマンションの建造主である。

「あんたねえ、こここの部屋を誰が貸してると思つてんのよ」

「君だつたね。感謝してるよ」

「ええ、そうよ。存分に感謝しなさい」

自己主張の少ない胸を張る。背丈もあまりない。まるで洋風人形のようである。

「で、なんの用ですか？」

男の問いに部屋を誰かを捜すようにきょろきょろと見る。しかしここは白い壁に包まれただけの部屋。男以外に誰もいない。セルマは鼻を一息鳴らすと眉毛を上げた。

「氷室に行動させたの？」

部屋にはさつきの匂いが残つていた。同じ女ならその匂いに気付く。とくに彼女ならよく解る。男は声なく頷いて見せた。

「私の子供達じゃ不満つてわけ？」

「そういうわけでは在りません。私の個人的な用ですからね。セラマに力を借りなくともこの程度……」

「わかつたわ、でもあの子失敗するわよ

ふふつと笑うだけだった。ここを出て行くとき氷室は口づけはいつもより熱かつた。その熱さを思い出すだけで心は高揚する。

「失敗したら君に頼むよ」

「そうするのが利口ですよ。白河先生」

自分の言いたい事を告げるとまるで嵐のようにならは去つていった。セルマの騒がしさに白河夾は心を乱さず一人、机と戻つていく。彼のなかに入つては消える彼女たちに自身の意を持ちあわせていかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5091y/>

---

幻想組曲

2011年11月24日12時55分発行